令和３年度看護研究交流センター

活動報告書

令和４年４月

公立大学法人新潟県立看護大学
看護研究交流センター

巻頭言

木々の若葉が色彩を増し春のおとずれを感じる季節となりました。

一方、新型コロナウイルス感染症は終息の兆しがみえない状況が続き、まだまだ先の長い戦いとなりそうです。

令和 3 年度は、看護研究交流センターの企画のうち、「いきいきサロン」の一回を中止といたしましたが、それ以外は全てを開催することができました。開催にあたっては、感染防止の観点から検討を行い、これまでにない多様な方法で実施いたしました。

まず、「看護職学習支援公開講座」は、令和 2 年度に開催が叶わなかったうちの 5 つのコースを Web 開催により実施いたしました。開催した講座は、以前よりニーズの高い看護研究に関するコースでした。そして、二年ぶりの開催となる「地域課題研究発表会」及び「上越地域看護研究発表会」は、会場参加と Web 配信を併用したハイブリッド開催とし、開催終了後 1 か月間のオンデマンド配信を実施いたしました。「地域課題研究」は、2 年分 11 件の発表を行いました。また、「いきいきサロン」は、対面での開催を行うにあたり、定員を 100 名とし、受付時の体温測定、アルコール消毒、資料は机置きにする等、感染防止対策を万全に整え実施しました。さらに、「上越教育大学との連携公開講座」及び「市民公開講座」も対面開催とし、それぞれ多くの方々にご参加いただきました。各部門の先生方が、感染防止対策について何度も検討を重ねてくださったお陰で、すべての企画を無事に執り行うことができました。加えて先駆的学習支援部門は、「看護・医療に関する新しい知見やトピックスについて取り上げ、地域住民に学習の機会を提供すること」を目的に活動して参りましたが、この様な機会は、さまざまな方法により提供されている現状があることから、今年度をもって部門を廃止することといたしました。市民公開講座は終了しますが、「上越教育大学との連携公開講座」は、地域社会貢献部門にて継続してまいります。

令和 4 年度は、今年度の経験を踏まえ、引き続き感染防止対策を万全に整えながら、各企画の開催を進めてまいります。今後も、県立看護大学の使命である地域社会への貢献活動として、県民や県内の看護職のために有益な情報発信ができるよう、企画・運営を進めて参ります。引き続きご理解とご協力をお願いいたします。

令和 4 年 3 月

新潟県立看護大学看護研究交流センター長

岡村典子

令和３年度看護研究交流センター　活動報告書

目　次

Ⅰ．事業実施報告

事　業　概　要　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　4

事　業　費　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　7

事　業　広　報　活　動　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　9

公　開　講　座　実　施　報　告　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　11

Ⅱ．部門報告

先　駆　的　学　習　支　援　部　門　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　13

地　域　社　会　貢　献　部　門　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　18

看　護　職　学　習　支　援　部　門　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　24

地　域　課　題　研　究　開　発　部　門　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　31

Ⅲ．事務局報告

出　前　講　座　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　36

Ⅳ．地域課題研究助成費の報告

2019 年度地域課題研究　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　43

2020 年度地域課題研究　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　56

Ⅰ．事業実施報告

事　業　概　要

新潟県立看護大学では、大学と地域の交流の場として「看護研究交流センター」を平成 14 年 4 月に開設しました。

大学の建学の精神である「ゆうゆう・くらしづくり」に基づき、大学の教育・研究の成果を地域へ提供し、活動を通じて地域と大学が共に成長していくための橋渡しを担っています。

地域の皆様からの要望をもとに、5 つの部門の活動を柱にして、大学の教職員が情報を発信しています。

Ⅰ　目的

看護研究交流センターは、看護科学における教育と研究の成果を地域に還元し、県民及び保健医療福祉関係者に対する学術支援ならびに生涯学習・研修支援活動を通して、県内の保健・医療・福祉の向上に貢献することを目的としています。

Ⅱ　各部門の主な活動内容

1. **先駆的学習支援部門**【市民公開講座】【看護大・上教大連携公開講座】

　医療分野の著名な知識人や、先駆的な取り組みを行っている実践者を招いた市民公開講座を開催している。また、上越教育大学との連携事業を担っている。

2. **地域社会貢献部門**【いきいきサロン】

　地域の医療者・大学と地域住民の交流会であるいきいきサロンを開催し、地域住民への学習の機会を提供している。

3. **看護職学習支援部門**【看護職学習支援公開講座】【バーチャルカレッジ】

　現職の看護師や潜在看護師のリカレント教育を推進する事業「どこでもカレッジプロジェクト」を主体に、県内の看護職への学び直しの機会を提供している。

4. **地域課題研究開発部門**

【地域課題研究公募】【地域課題研究発表会】【上越地域看護研究発表会】

　県内の保健・医療・福祉に携わる看護職を対象に本学教員と共同で行う研究を公募し、その成果報告会となる地域課題研究発表会や、上越地域の看護研究の発表の場である上越地域看護研究発表会の開催(上越地域振興局健康福祉環境部と共催)を担っている。

5. **特別研究部門**

　一般市民の健康の保持・増進や看護職の質的向上の推進の一助として貢献することを目的に、県内の保健医療看護上の課題に対応した研究課題を設定して取組んでいる。

Ⅲ　事務局

【出前講座】

本学教員の研究成果を地域へ還元する地域貢献活動の一環として実施している。

【卒業生支援】

卒業生支援事業として、相談窓口の開設、小規模会合に対する助成を行っている。

Ⅳ　令和３年度　看護研究交流センター構成員

区　分	氏　名	職　名
	センター長　岡　村　典　子	基礎看護学教授
先駆的学習支援部門	部門長　平　澤　則　子	地域看護学教授
	相　澤　達　也	成人看護学助教
	大　倉　由　貴	老年看護学助教
地域社会貢献部門	部門長　河原畑尚美	老年看護学准教授
	山　田　恵　子	小児看護学准教授
	川　島　良　子	基礎看護学講師
	相　澤　達　也	成人看護学助教
	高　橋　絹　代	成人看護学助教
	大　倉　由　貴	老年看護学助教
	八巻ちひろ	母性看護学助教
	小　林　宏　至	小児看護学助手
	山　田　彩　乃	基礎看護学助手
看護職学習支援部門	部門長　伊豆上智子	看護管理学教授
	小　林　綾　子	成人看護学講師
	舩　山　健　二	精神看護学講師
	野　澤　祥　子	小児看護学助教
	前川絵里子	地域看護学助教
	上　田　　恵	母性看護学助教
	小　林　宏　至	小児看護学助手
	山　田　彩　乃	基礎看護学助手
地域課題研究開発部門	部門長　原　　等　子	老年看護学准教授
	石　原　千　晶	成人看護学講師
	安　達　寛　人	精神看護学講師
	谷内田潤子	基礎看護学助教
	上　田　　恵	母性看護学助教

区　分	氏　名	職　名
特別研究部門	部門長　岡　村　典　子	基礎看護学教授
	平　澤　則　子	地域看護学教授
	伊 豆 上 智 子	看護管理学教授
	河 原 畑 尚 美	老年看護学准教授
	原　　等　子	老年看護学准教授
	市　川　克　巳	事務局長
	丸　山　紀　子	看護専門職員

事　　業　　費

令和３年度予算配分額　4,803,000 円

Ⅰ　各部門配分額　（単位：円）

先駆的学習支援部門	270,000
地域社会貢献部門	143,000
看護職学習支援部門	330,000
地域課題研究開発部門	168,000
特別研究部門	200,000
小計	1,111,000

Ⅱ-1　地域課題研究【2019 年度研究】（前年度繰越）　［1.～6.研究代表者（所属）］

１．霜垣 美由紀（魚沼基幹病院）	84,487
２．塩谷 幸祐　（さいがた医療センター）	1,990
３．長井 卓也　（魚沼基幹病院）	16,546
４．西山 まゆみ（長岡赤十字病院）	34,322
５．渡辺 沙織　（さいがた医療センター）	57,494
６．小林 恵子　（長岡赤十字病院）	24,817
小計	219,656

Ⅱ-2　地域課題研究【2020 年度研究】（前年度繰越）　［1.～5.研究代表者（所属）］

１．木村 恵美　（長岡赤十字病院）	47,448
２．田巻 康弘　（介護老人保健施設ケアホーム三条）	65,760
３．南雲 敬子　（長岡赤十字病院）	95,000
４．松井 ルミ子（新潟県立中央病院）	58,844
５．涌井 幸恵　（新潟県立中央病院）	23,359
小計	290,411

Ⅱ-3　地域課題研究【2021 年度研究】　［1.～12.研究代表者（所属）］

１．齊藤 千恵子（厚生連糸魚川総合病院）	100,000
２．清水 博美　（新発田リハビリテーション病院）	100,000
３．本田 ひとみ（新潟県立リウマチセンター）	78,000
４．本山 和樹　（長岡赤十字病院）	100,000
５．皆川 みどり（長岡赤十字病院）	100,000

６．赤川 美穂　（長岡赤十字病院）	100,000
７．石川 真彩　（さいがた医療センター）	100,000
８．土屋　尚　（新潟労災病院）	100,000
９．佐藤 予右子（上越地域医療センター病院）	99,000
１０．水澤 三津江（新潟労災病院）	90,000
１１．内田 絵里奈（新潟県立中央病院）	100,000
１２．斎藤 真樹子（総合リハビリテーションセンターみどり病院）	91,000
小計	1,158,000

Ⅲ　その他

事務局管理費	2,023,933

合計	4,803,000

事　業　広　報　活　動

Ⅰ　情報公開

情報公開についての活動は以下のとおりである。

1. 令和 2 年度看護研究交流センター活動報告書　：令和 3 年 4 月発行
2. 2021 年度看護研究交流センターガイドブック：　3,200 部
3. 2021 年度看護研究交流センター出前講座(パンフレット)：　1,500 部
4. 看護研究交流センター　ホームページ
5. いきいき県民カレッジ：平成 26 年度より看護研究交流センターの公開講座を登録
(※看護職学習支援公開講座を除く)

Ⅱ　広報活動

広報誌、新聞、ラジオ等における広報目的の掲載は以下のとおりである。

1. 先駆的学習支援部門(8 回)

講座名	記事掲載・放送
『看護大・上教大連携公開講座』 長寿の秘訣！ ～健康で豊かに生きる～	上越 ASA ニュース(6/17)，上越よみうり(6/27)，上越妙高タウン情報（雪国ジャーニー)，がんぎネット（6/14）
『市民公開講座』 日本の社会経済格差と子どもの食・栄養 －実態調査から	新潟県立看護大学後援会だより(8 月)，新潟日報おはよう通信(9/25)，上越 ASA ニュース(9/11)，上越タイムス(9/14)

2. 地域社会貢献部門『いきいきサロン』(37 回)

講座名	記事掲載・放送
年間概要	上越タイムス(4/14)
【第 1 回】 腰痛症 そんなに心配しなくても大丈夫ですよ。	上越タイムス(4/14) (4/27) (5/19)，上越 ASA ニュース(4/17)，上越よみうり(4/20) (4/26) (4/27)，新潟日報おはよう通信(4/23)，上越市有線放送
【第 2 回】 リラックスできる温泉の入り方・選び方	上越よみうり(5/23) (5/25) (5/27) (5/29)，上越タイムス(5/25)，上越 ASA ニュース(5/26) (6/1)，がんぎネット(5/24)
【第 3 回】 知っておきたい耳、鼻、のどの病気と その対策	上越タイムス(6/29) (7/14)，上越 ASA ニュース(6/30)，がんぎネット(6/17)
【第 4 回】 これならできそう 運動療法 ～糖尿病予防 できることからはじめましょう～	上越タイムス(8/17)（中止 9/4～9/16)，上越 ASA ニュース(8/19)（中止 9/3)，新潟県立看護大学後援会だより(8 月)，上越よみうり(中止 9/3～10)，がんぎネット(8/12) (中止 9/3)

講座名	記事掲載・放送
【第 5 回】 ストレングスを活かした心豊かな暮らしについて	新潟県立看護大学後援会だより(8 月)，がんぎネット(9/21)，新潟日報おはよう通信(9/25)，上越 ASA ニュース(10/5)，上越よみうり(10/10)
【第 6 回】 認知症になっても笑顔でくらしたい	新潟県立看護大学後援会だより(8 月)、上越タイムス(10/19)，がんぎネット(10/19)

3. 看護職学習支援部門『看護職学習支援公開講座』(1 回)

講座名	記事掲載・放送
年間概要	上越タイムス(4/13)

4. 地域課題研究開発部門(2 回)

発表会名	記事掲載・放送
2021 年度上越地域看護研究発表会 及び 2021 年度地域課題研究発表会（令和元年度・2 年度研究報告）	がんぎネット(6/14) (9/22)

5. 事務局(2 回)

講座名	記事掲載・放送
出前講座	上越 ASA ニュース(3/23)，上越タイムス(3/30)

Ⅲ　記事掲載・放送

新聞、放送等における取材は以下のとおりである。

1. 先駆的学習支援部門(1 回)

講座名	記事掲載・放送
『看護大・上教大連携公開講座』 長寿の秘訣！ ～健康で豊かに生きる～	上越タイムス(7/13)

2. 地域社会貢献部門『いきいきサロン』(1 回)

講座名	記事掲載・放送
【第 1 回】 腰痛症 そんなに心配しなくても大丈夫ですよ。	上越タイムス(5/25)

3. 地域課題研究開発部門(1 回)

発表会名	記事掲載・放送
2021 年第 11 回上越地域看護研究発表会 2019 年度, 2020 年度研究地域課題研究発表会	上越タイムス(10/6)

令和3年度　看護研究交流センター公開講座実施報告

	日時	講座名	テーマ	参加者数
1	5月20日(木) 18:30～19:30	いきいきサロン	腰痛症　そんなに心配しなくて大丈夫ですよ。	85
2	5月22日(土) 13:00～16:00	看護職学習支援 公開講座	さあはじめよう看護研究①「看護研究のテーマをみつけよう」	29
3	6月17日(木) 18:30～19:30	いきいきサロン	リラックスできる温泉の入り方・選び方	76
4	6月26日(土) 13:00～16:00	看護職学習支援 公開講座	さあはじめよう看護研究　②「看護研究方法の理解」	21
5	7月10日(土) 13:00～16:00	看護職学習支援 公開講座	さあはじめよう看護研究 ③「研究計画書の書き方」	21
6	7月10日(土) 13:30～15:30	看護大・上教大 連携公開講座	長寿の秘訣！～健康で豊かに生きる～	89
7	7月15日(木) 18:30～19:30	いきいきサロン	知っておきたい耳、鼻、のどの病気とその対策	83
8	9月 4日(土) 13:00～16:00	看護職学習支援 公開講座	さあはじめよう看護研究 ④「研究の実践に向けて；相談会」	6
9	9月16日(土) 18:30～19:30	いきいきサロン	これならできそう　運動療法 ～糖尿病予防　できることからはじめましょう～	中止
10	10月 2日(土) 13:00～16:00	研究発表会	2021 第11回 上越地域看護研究発表会 (上越地域振興局健康福祉環境部共催) 令和2年度 地域課題研究発表会（令和元年度研究）	99
11	10月13日(水) 18:00～19:30	市民公開講座	日本の社会経済格差と子どもの食・栄養ー実態調査から	114
12	10月21日(木) 18:30～19:30	いきいきサロン	ストレングスを活かした心豊かな暮らしについて	59
13	10月26日(火) 10:00～12:00	看護職学習支援 公開講座	さあはじめよう看護研究 ⑤「わかりやすいプレゼンテーション」	15
14	11月18日(木) 18:30～19:30	いきいきサロン	認知症になっても笑顔でくらしたい	77
			いきいきサロン　5回	380
			看護職学習支援公開講座　5回	92
			市民公開講座　1回	114
			看護大・上教大連携公開講座　1回	89
			研究発表会　1回	99
			合計　13回	774

Ⅱ．部門報告

先駆的学習支援部門

平澤則子、相澤達也、大倉由貴

Ⅰ　本部門の事業目的

先駆的学習支援部門は、看護・医療・福祉分野の研究や実践に関する新しい知見やトピックスについて著名な学識者を招く公開講座と、上越教育大学との連携講座を開催し、地域住民の方々に学習の機会を提供している。

Ⅱ　令和３年度の事業概要

１．市民公開講座

テーマ　　日本の社会経済格差と子どもの食・栄養－実態調査から

日　時　　令和３年 10 月 13 日(水)　18:00～19:30

講　師　　村山伸子先生（保健学博士）新潟県立大学 人間生活学部 健康栄養学科 教授

（講師紹介）

新潟県減塩ルネサンス運動を推進してきた。研究では、近年の日本の健康格差や食生活格差の研究、世界各地の栄養問題についてフィールドワークをとおした調査を実施し、さらに日本やアジア地域で学校給食に関する実践と研究を行っている。食と栄養をとおして、世界中の人々が笑顔になれることを目指している。

（講師経歴）

1983 年中央大学法学部卒業

1989 年女子栄養大学栄養学研究科修了 栄養学修士

1998 年東京大学大学院医学系研究科　博士課程修了　博士（保健学）

厚生労働省厚生科学審議会専門委員（健康日本 21（第二次）推進専門委員会）

内閣府男女共同参画推進連携会議議員、新潟県子どもの貧困対策推進検討委員会委員長

新潟県食育推進委員会委員等

講義内容

１．子ども貧困の現状

「貧困」であるか否かは、その人が生きている社会の「普通の生活」との比較によって相対的に判断され、生きている国、地域、時代等によって基準は異なる。日本の子どもの貧困率はひとり親世帯で高く約５割にものぼり、世界的にみても先進国の中で高い方から 10 位、ひとり親世帯では１位となっている。

２．世帯の社会経済状態によって子どもの食生活に違いはあるか？

世帯収入が少ない世帯の保護者は、野菜、肉や魚といった必要な食品を買えない、時間的なゆとりがない、食生活の知識が少ない傾向があり、子どもは家庭で栄養バランスがよい食事をしていない傾向がある。新潟市の幼児調査においても、世帯年収が低い群は高い

群と比較して栄養素等・食品群の摂取量平均値が低かった。子どもの貧困の連鎖を断ち切るには、健やかな成長に必要な栄養の確保のための対策と、自立に必要な食生活の基本スキルの習得のための食育が必要であり、生活上の体験の機会が等しく保障されることが重要である。

３．新型コロナウイルス感染症拡大の影響は？

幼児、小中学生に共通して緊急事態宣言期間は子どもの食事に影響し、世帯年収により影響に差がみられた。世帯年収が低い方が、主食のみの食事や甘味飲料が増加、肉魚卵や野菜の摂取回数が低下するなど影響が大きかった。

４．すべての子どもの食事を保障するためにどんな方法があるか？

行政主体で取り組む支援として、学校給食や公営児童クラブの食事提供といった社会全体を対象とした支援、食事支援ボランティアや子ども配食サービスなどの生活困窮世帯を対象とした支援がある。また、民間主体で取り組む支援として、子ども食堂やフードバンクがある。ポストコロナ時代においては、地域で、多様な主体がすべての子どもの食を保障し、育ちを保障する時代へと変わっていくことが期待される。

参加者の状況

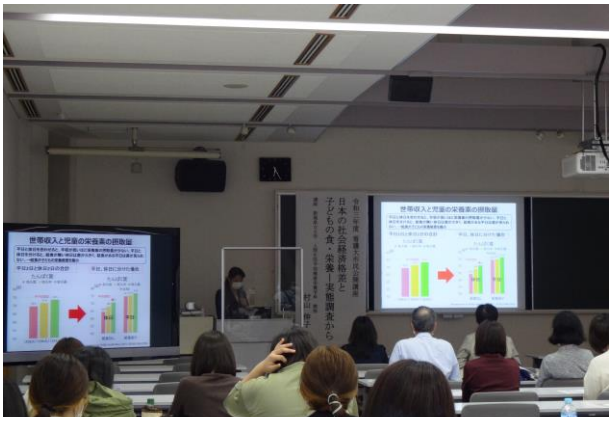
(1)参加者　129 人（うち学生 87 名）

(2)アンケート結果による評価

①アンケートの回収 115 人（89.1%）

②講師の話の全体的な感想 32 人分

非常に良かった	18 人（56.3%）
良かった	11 人（34.4%）
普通	1 人（3.1%）
無回答	2 人（6.3%）



③感想の一部

市民：

・学校給食が貧困格差を縮めるために担う役割は大きいとわかった。今後、教育現場で保護者や児童にどのような食育が必要で、どうすれば効果的なのか考えていきたい。

・研究データ、調査結果をもとに経済格差と食事、栄養について説明いただき、現状について理解を深めることができた。

・生活支援やさまざまな相談窓口の開設時間が一般的な就労時刻になっているが、夜間や休日の業務があるとよいと思う。住民と行政のニーズや価値観のズレを感じる。今日の講演を聞いて、実際どう動けるかということが重要だと思う

・学校給食関係者です。子どもたち(特に貧困層)にとって、学校給食が意義あるものとより強く感じ、今後の業務のさらなる責任感が生じました。食育も進めていきます。

学生：

子どもの貧困に対してネットのニュースなどでしか見る機会がなかったが、この講義を聞くことによって COVID−19 禍での貧困問題など最新の状況を考えることができた。特に

緊急事態宣言下での食生活の変化についての調査が興味深かった。低所得世帯では宣言下ではバランス良く食事を食べることが難しく、特に肉や魚よりも価格が高い野菜の摂取が低いことと、甘味飲料やスナック菓子の摂取が増えたことが気になった。宣言下では学校に通うことが難しく、子どもも自宅で過ごすことが多くなり、保護者の負担が大きくなったと感じる。低所得世帯では保護者の余裕もなくなり、経済的な余裕は家族関係にも影響するのではないかと感じた。子どもの食を保証することは生活しやすい地域をつくることにもつながるため、今後も子どもの貧困問題について意識していきたい。

２．令和３年度　看護大・上教大連携公開講座

テーマ　長寿の秘訣！健康で豊かに生きる
日　時　令和 3 年 7 月 10 日(土) 13:30～15:30
場　所　新潟県立看護大学第 1・2 ホール
講　師　新潟県立看護大学　小林綾子講師　大口洋子助教
　　上越教育大学　光永伸一郎教授　池川茂樹准教授

講座の概要

両大学の研究者 4 名が「健康で豊かに生きる」ための秘訣について解説し、トークセッションが行われた。

講演内容

○光永教授（上越教育大学）:**「先人から学ぶ長寿食」**

仲睦まじい夫婦と言われた徳川家茂と和宮は脚気で亡くなっている。日本では白米が常食されるようになった江戸時代から脚気が広く見られ、原因はビタミン B1 を豊富に含む胚芽を取り除いた白米の食べ過ぎとおかずの乏しさである。ビタミン B1 は不足しやすい栄養素であり、ビタミン B1 を多く含む食材には玄米・豚肉・ウナギなどがある。豚肉を食べていた徳川慶喜は、脚気ではなかったと言われている。天下を取った徳川家康は健康オタクであったことはよく知られている。自分で漢方薬を作り、粗食（麦飯・味噌汁・いわしの干物）であったという。この大麦には水溶性食物繊維の 1 種であるβグルカンが多く含まれており、食後の血糖値の上昇を抑える効果がある。特筆すべきは鷹狩り（適度な運動）を好んで行っていたことである。また、家康はとろろ飯が大好物であったが、長寿食として麦飯+長芋は最強の組み合わせである。伊達政宗の強さは「仙台味噌」にあると言われる。味噌には生活習慣予防効果がることや、近年は発酵過熟成過程でできるメラノイジンには抗酸化作用があり、老化予防効果が報告されている。先人たちは玄米や麦飯、ぬか漬け、味噌等の発酵食品を好んで食しており、この食生活を参考に健康長寿を実現しよう。

○池川准教授（上越教育大学）:**「with コロナ時代の運動のススメ」**

コロナ禍における巣ごもり生活は運動不足となり、健康二次被害が問題となっている。運動不足と肥満は慢性的な炎症を招き、糖尿病や認知症、がんの発症リスクを高めることや、運動不足は免疫力を低下させ上気道感染（風邪）のリスクを高めることが報告されている。我々の研究では、年間トレーニング日数と血漿量は正の相関が認められ、運動をすればする

ほど血液量が増え、その結果、熱中症のリスクが低下することがわかっている。我々は、コロナ時代の効果的な運動として「インターバル速歩」というウォーキング法を提唱している。体力の向上や健康の維持・増進に重要なのは、最大体力の 70 %強度の運動を、週合計 60 分以上実施することが効果的である。「インターバル速歩」とは、最大体力の 70 %強度の早歩きとゆっくり歩きを、3 分ごと交互に繰り返す歩き方である。早歩きの時間が週合計 60 分以上となるように実施することで体力の向上を促し、生活習慣病指標（肥満・高血圧・高血糖・脂質代謝異常）を改善できる。さらに、インターバル速歩終了直後に乳製品を摂取することで、体力向上効果や生活習慣病指標の改善効果、熱中症や感染症の予防効果を高めることができる。コロナ禍をきっかけに運動の重要性を見直し、健康な身体を手に入れよう。

○小林講師（新潟県立看護大学）:**「コロナに負けない食生活のポイント」**

酒のつまみとして大人気の枝豆の作付面積は、新潟県が全国第 1 位である。上越市の茄子の作付面積は県内第 2 位であるが出荷量は 3 位である。食材に恵まれている上越では、旬の野菜の食べすぎに気をつけることも大切である。私たちの食生活の実態は、コロナ感染前後で比べても大きな変化はなかったと報告されている。健康づくりにおいては、感染予防としてバランスの良い食事をとり十分な睡眠をとること・体を温めること、筋力・体力を維持するために適切なエネルギー量を摂取し、バランスの良い食事と適切な運動を行うことが重要となる。必要なエネルギー摂取量は、【体重×体重当たりの推定エネルギー必要量】（日本人の食事摂取基準、厚生労働省、2020）で求めることができる。1 食は必要なエネルギー摂取量の 1/3 を目安にする。1 日 3 食を食べることが基本であり、毎日 10 の食品群【さあにぎやかに いただく】を合言葉に様々な食品を食べるとよい。栄養バランスのためには主食・主菜・副菜（1-2 品）・その他の食品のバランスを意識して献立を決め、主菜のたんぱく質は毎食 1 品用意する。タンパク質は体重 1 kg当たり 1 g/日以上必要である。旬の食材には栄養成分が豊富に含まれているため、地元で採れる旬の食材を活用しよう。コロナ禍にあっても今までどおりの食事を続けて健康な生活を目指そう。

○大口助教（新潟県立看護大学）:**「ストレングス(強み)を発揮して自分らしく暮らす」**

ストレングスとは、【その人が本来もっている強さ、力、能力、誰でもがどのような状況にある人でもまだ発見されていない無限の力がある】という前提のもとに、「個人及びその人を取り巻く環境が持っている強み」（佐久川、2014）と定義されている。誰もが個人のストレングスを持っている。本日は自分のストレングスを活用して自分らしく過ごすためにどうしたらよいかを考えていただきたい。ストレングスの構成要素は、個人のストレングスには願望・能力・自信が、環境のストレングスには資源・社会関係・機会が含まれており、これらが生活の場で関与し、生活の質や満足感などの望まれる成果となる。私の研究では、豪雪地帯に暮らす高齢者は、個人のストレングスの願望では「自立してこの地で暮らしたい」、能力では「コメや野菜の生産とその保存・加工技術の獲得」、自信では「過去の苦難から得た自信」、環境のストレングスの資源では「購入によって入手されるような資産（雪がもたらす自然の恵みなど）」、社会関係では「その人が享受する社会関係(人々・利益)」、機会では「満たされるのを待っている空間（自宅が交流の場になる）」などたくさんのストレングスを持っていることが分かった。日常生活の中で心配なことや困ったときにこのストレングスがより発揮される。自分のストレングスを発揮して自分らしく暮らそう。

参加者の状況

(1)参加者　81 人

(2)アンケート結果による評価

①アンケートの回収 77 人（95.1%）

②講師の話の全体的な感想

非常に良かった	34 人（44.2%）	良かった	33 人（42.9%）
普通	7 人（9.1%）	少し難しかった	0 人（0.0%）
難しかった	0 人（0.0%）	無回答	3 人（3.9%）

③感想の一部

・4 名の先生方のお話の中で、各々わかり易く説明して頂いた。これからの生活に役立てたい。麦飯、乳製品、旬の食品、ストレングス（はじめて聞きました）。

・先人達は食生活に気を付けて生活していた点は興味深かった。

・豪雪地帯に暮らす高齢者の研究調査結果は大いに参考になった。私自身のストレングスを取り上げていきたい。ストレングスの話⇒ポジティブな話で面白いです。

・健康な食生活の合言葉「さあにぎやかにいただく」⇒多種多様な食材⇒面白いです。

・旬の食材の力を活用。バランスよく日常生活ができたら良いと思う。

・居住地域にある大学で一般の方が講座に参加できるという機会があり嬉しく思います。

参加者の皆さまからは、講義内容を自分の生活に取り入れるため具体的な質問がされました。

地域社会貢献部門

河原畑尚美、山田恵子、川島良子、相澤達也、高橋絹代
大倉由貴，八巻ちひろ，小林宏至，山田彩乃

Ⅰ　本部門の事業目的

地域社会貢献部門では、地域住民の方々が気軽に大学に足を運び、健康について関心を寄せ、学び合う場を目指す「看護大いきいきサロン」を平成 21 年度から開催している。

Ⅱ　事業の概要

1. 開催状況

今年度は、昨年新型コロナウィルスのため中止された全 6 回（表 1 参照）を感染防止対策を講じて開催する計画とした。しかし 8 月に県内感染者が増加し、新潟県より特別警報が発令されたため大学方針に従い 9 月の開催は中止した（同内容は次年度に開催予定）。10 月、11 月については予定通りに開催した。開催時間はいずれも第 3 木曜の 18:30～19:30 であった。講師は、上越地域の医師、認知症の家族介護の当事者でもある“認知症の人と家族の会新潟支部代表”、また本学老年看護学教員、前本学精神看護学教員であった。それぞれ、専門テーマで講演の後、地域住民の方々からの質問に答えてもらう時間を設けた。

令和 3 年度の参加者数は 365 人であり、平成 21 年度から開始して以降、いきいきサロンの総参加者数は 7,348 人となった。

表 1　開催日時およびテーマ・講師と参加人数

回	開催日	テーマ	講師	参加人数
第 1 回	5 月 20 日	腰痛症　そんなに心配しなくても 大丈夫ですよ	上越地域医療センター病院 整形外科部長　小坂 泰啓 先生	85
第 2 回	6 月 17 日	リラックスできる温泉の入り方・選び方	前新潟県立看護大学　精神看護学 講師　後田 穣	76
第 3 回	7 月 15 日	知っておきたい耳、鼻、のどの病気とその対策	おひさま耳鼻咽喉科　院長 五十嵐 良和 先生	83
第 4 回	9 月 16 日	中止		
第 5 回	10 月 21 日	ストレングスを活かした豊かな暮らしについて	新潟県立看護大学　老年看護学 助教　大口 洋子	59
第 6 回	11 月 18 日	認知症になっても笑顔でくらしたい	社団法人認知症の人と家族の会 新潟支部代表　金子 裕美子 先生	62

2. 参加者のアンケート結果

1) 参加者の年代

70 歳代が 175 人(50%)と最も多く、次いで 60 歳代が 86 人(24%)、50 歳代が 50 人(14%)であった。

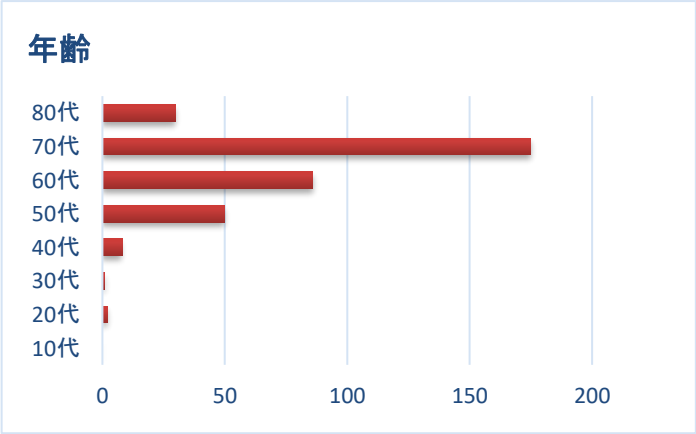


図 1　年代

2) これまで参加した回数

これまでに「10 回以上」参加した人が 171 人(48%)と最も多く、次いで「1～5 回」参加した人が 86 人(24%)、「初めて」が 49 人(14%)の順であった。

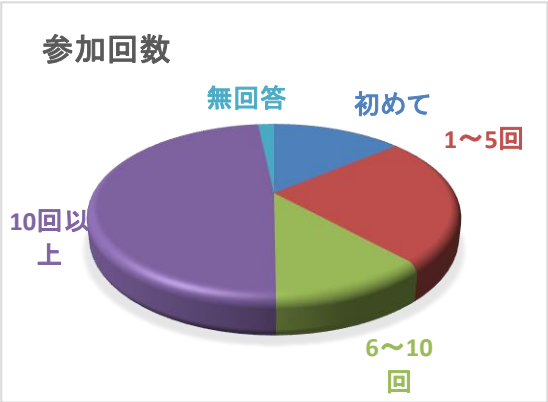


図 2　参加回数

3) 周知方法（複数回答）

「知人友人」によって参加した人が 121 人（32%）と最も多く、次いで「前回の案内」によって参加した人が 74 人(21%)、「チラシ」61 人(16%)、「有線」39 人(10%)の順であった。

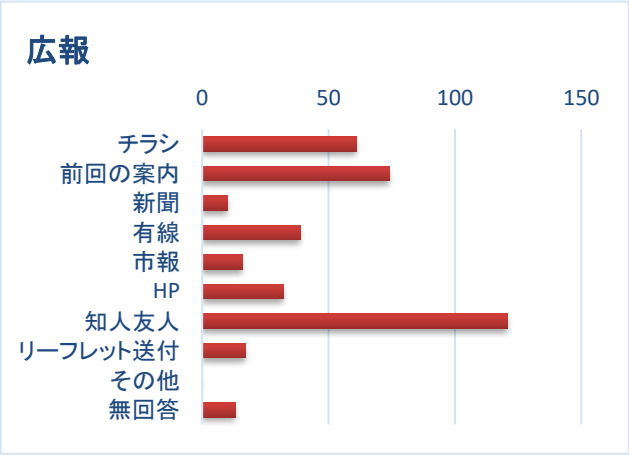


図 3　周知方法（複数回答）　(人)

4) 参加理由（複数回答）

参加理由では、「テーマに興味・関心があったから」が 235 人（67%）と最も多く、次いで「健康のため」が 95 人（27%）、「毎回参加しているから」が 91 人(26%)、「講師の話が聞きたかったから」が 81 人(23%)であった。

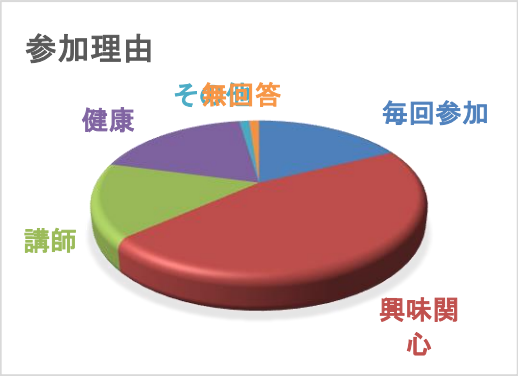


図 4　参加理由（複数回答）（人）

5) 講師の話についての感想

全体では、「非常に良かった」と回答した人は 149 人(42%)、「良かった」と回答した人は 120 人(34%)であった。

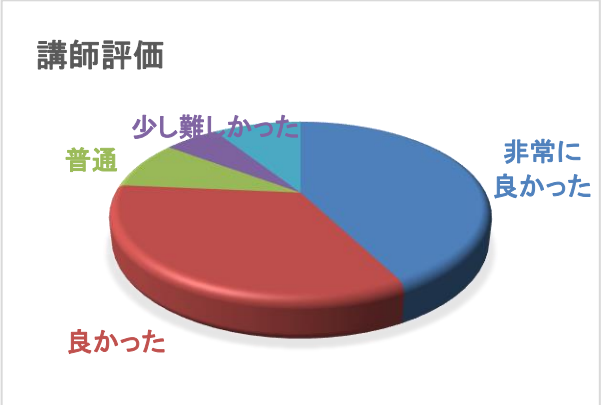


図 5　講師の話についての感想　（人）

6) 今後、とりあげてほしいテーマ（複数回答）

多かった項目は、「認知症」が 85 人(24%)と最も多く、次いで「感染症」76 人(22%)、「アレルギー」75 人(21%)、「目の病気」74 人(21%)、「肩こり・腰痛」69 人(20%)の順に多かった。その他の自由記載には、ストレス、生活習慣病、がんの話等、多くテーマがあげられていた。

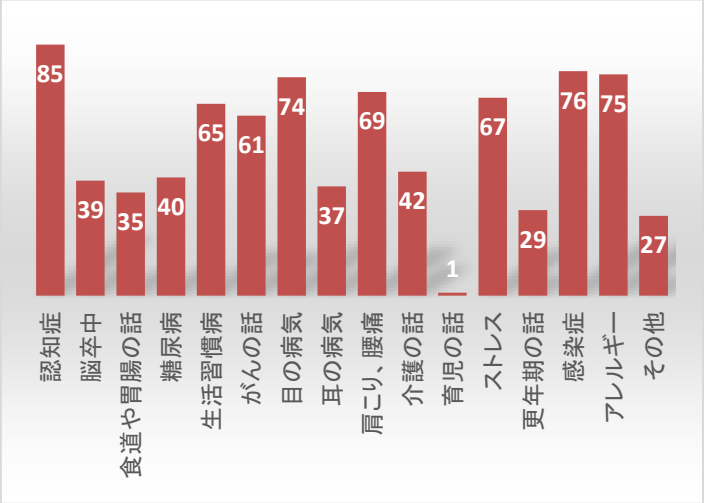


図 6　今後とりあげてほしいテーマ（複数回答）（人）

2. いきいきサロンの運営

1）企画実行メンバー

地域社会貢献部門のメンバー9 名が企画から運営までを行った。チラシの作成・発送、新聞広告への掲載依頼、講師資料の印刷等は看護研究交流センター事務局が行った。また、当日の運営では学生アルバイト 4 名が会場準備や受付・参加者の誘導を行った。

2）広報活動

看護研究交流センターの案内、リーフレットの発送、看護大いきいきサロン通信の発行（2 回）、講座のチラシの作成と配布、大学ホームページでの情報公開、NIC かわら版、上越よみうり、上越 ASA ニュースへの掲載を行った。

3）講師謝礼　　学外の講師には 1 回 1 万円および交通費を支払った。

4）参加者への対応

新型コロナウイルス感染防止対策として、お茶のサービス廃止、参加は 100 名を上限として事前申込制、第 1・第 2 ホールを使用し座席は十分な間隔をとる、入室前にサーマルカメラによる体温測定、手指消毒・マスク着用の励行、資料やアンケートの配布・回収は混雑を避けるため個々に机置き、ボールペンの貸し出しは持参していない方のみ、入退室時は混雑しないように誘導する等、具体的な対応を実施した。

また、これまで第 1 回目の受講者に配布していたグッズ（ファイルと袋）は中止し、資料を新潟県立看護大学のロゴマークがついたクリアファイルに入れて配布した。

本講座は、新潟県の「いきいき県民カレッジ登録講座」に登録されており、スタンプやシールを集めている参加者もある。これまで参加者から求めがあった際には対応していたが、今年度あらためて周知し希望者には手帳の配布を行った。

3. 令和 3 年度の評価と今後の課題

令和 3 年度の参加人数は、一昨年度よりも 234 人下回る 365 人（平均 73 人/回）であった。その理由として、昨年 1 年間中止していたこと、新型コロナウイルス感染防止対策として事前申込制にしたこと、参加者は高齢者が多いことから市内の感染状況によっては安心して集会などに参加できない人もいたのではないかと考える。しかし、無開催の期間が生じたり、事前申込が必要になるなど、参加しにくい状況があったにもかかわらず平均 73 人/回の参加があり、継続して参加している人が多かったことから本講座が定着されてきていると感じる。

今年度は、第 6 回の認知症の介護の経験を交えた講演が大変好評であった。体験者の話であり、より身近で心打たれる内容だったと考えられるため、今後も講師の検討については、専門職だけでなく体験を語れる方なども含めて考えていきたい。

次年度も、引き続き市内の感染状況に合わせて安心して参加できる感染防止対策を講じ、参加者の意見や希望を取り入れつつ運営していきたい。また、本講座は県の「いきいき県民カレッジ登録講座」であることを明示し、参加者に有効なものとして活用していきたい。

資料１－令和３年度いきいきサロン通信第１号

公立大学法人　新潟県立看護大学　看護研究交流センター　地域社会貢献部門

「いきいきサロン」は、健康に関心のある地域の皆様と看護や健康等の専門家が気軽に交流することを目的としたサロンです。今年度は、昨年度予定していたテーマをそのまま今年度のテーマとして準備いたしました。今年度のいきいきサロンが何事もなく予定通り開催できますように、参加者の方々のご協力をいただきながら感染症予防対策を万全に取り組んで参りたいと思います。

皆様のご参加を心よりお待ちしております。

第12巻　第1号　2021年6月17日

日時	テーマ・講師
7/15(木) 18：30～19：30	知っておきたい耳、鼻、のどの病気とその対策 おひさま耳鼻咽喉科　院長　五十嵐 良和 先生
9/16(木) 18：30～19：30	これならできそう 運動療法 ～糖尿病予防 できることからはじめましょう～ 新潟県立看護大学　成人看護学　講師　小林 綾子 先生
10/21(木) 18：30～19：30	ストレングスを活かした豊かな暮らしについて 新潟県立看護大学　老年看護学　助教　大口 洋子 先生
11/18(木) 18：30～19：30	認知症になっても笑顔で暮らしたい 社団法人認知症の人と家族の会　新潟支部代表　金子 裕美子 先生

※定員100名（事前申し込み制）、参加費無料です。

第１回いきいきサロンが開催されました！

第1回いきいきサロンが5月20日（木）に開催されました。
上越地域医療センター病院 整形外科部長 小坂泰啓先生より、「腰痛症、そんなに心配しなくても大丈夫ですよ」をテーマにお話しいただきました。85名の方からご参加いただき、先生のユーモアある講演に「大変面白かったです」「とても楽しいお話であきがこなく良かったです」と好評でした。また、いきいきサロンの再開に喜びの声もいただき、大学としても大変嬉しい第1回の開催となりました。

資料２－令和３年度いきいきサロン通信第２号

公立大学法人　新潟県立看護大学　看護研究交流センター　地域社会貢献部門

看護大いきいきサロン通信

第 12 巻 第２号 2021 年 10 月 21 日発行

「いきいきサロン」は、健康に関心のある地域の皆様と看護や健康等の専門家との交流の場として、平成 21 年度から開催しています。今年度行われました、第２回～第３回のサロンの内容をご紹介します。今後も皆様からのご要望や健康に関する世の中の動き等を参考にしながら、いきいきと生活していくことを応援するテーマを準備し、皆様をお待ちしております。

感染症予防対策を万全に実施し、安心して受講していただけるように取り組んでまいります。

第２回　６月 17 日（木）

「リラックスできる温泉の入り方・選び方」

講師：**後田　穣　先生**

（元新潟県立看護大学

精神看護学講師）

温泉の効能や入浴時の注意点を踏まえながら、リラックスできる温泉の入り方についてご講義いただきました。参加いただいた皆様からは、「先生の声、テンポにリラックスできました。おすすめされた温泉から行ってみようと思います。とても楽しめました」「今までなんとなく温泉に入っていたが、今日講師の温泉の入り方を聞き、思い出しながら温泉に入ろうと思う」などの感想をいただきました。

第３回　７月 15 日（木）

「知っておきたい耳、鼻、のどの

病気とその対策」

講師：**五十嵐　良和　先生**

（おひさま耳鼻咽喉科院長）

よくある耳・鼻・のどの異常とその対策について写真や動画を織り交ぜながら、とてもわかりやすく楽しくご講義いただきました。ご参加いただいた皆様からは、「耳・鼻の中は、自分ではなかなか見ることが出来ない所なので、今回見せていただき、先生の話を聞くことが出来て良かったです」「めまい対策や、魚のとげが刺さったときの対策が参考になりました」「耳鳴りのお話が参考になりました」などの感想をいただきました。

	日時	講師	テーマ
第５回	10 月 21 日（木）	老年看護学　助教 大口　洋子　先生	ストレングスを活かした豊かな暮らしについて
第６回	11 月 18 日（木）	社団法人認知症の人と家族の会新潟支部代表 金子　裕美子　先生	認知症になっても笑顔でくらしたい

開催日時は、木曜日 18：30～19：30 です。事前申し込み制で、参加費は無料です。

～お詫び～

この度、9/16（木）に予定しておりました第４回「これならできそう運動療法～糖尿病予防できることからはじめましょう～」ですが、新型コロナウイルス感染症の流行に伴い、新潟県より移動自粛制限や集会の制限を受けて、中止とさせていただきました。楽しみにしていただいた皆様には、大変申し訳ありませんでした。引き続き感染症対策に留意しながら開催していきますので、どうぞよろしくお願いいたします。

看護職学習支援部門

伊豆上智子、小林綾子、舩山健二、野澤祥子、
前川絵里子、上田恵、小林宏至、山田彩乃

Ⅰ　本部門の事業目的

新潟県内、特に上越地域の現職の看護職や潜在看護職の資質向上を目指し、様々な学習および研修の機会を提供する。このことにより看護職の資質向上をはかり、県民のヘルスケアの充実を目指す。

Ⅱ　2021 年度の事業概要

本部門では、公開講座とバーチャルカレッジの 2 つの活動を通して、現職の看護職や潜在看護職のリカレント教育を推進する事業「どこでもカレッジプロジェクト」を行っている。今年度は、看護職向け公開講座の開催（5 回）、どこカレ通信の発行（2 回）、バーチャルカレッジの運営を行った。以下に、事業の詳細を記す。

１．看護職学習支援公開講座

新型コロナウイルス感染症による影響を受けにくい開催方法として、オンライン会議システム Zoom を使用し、看護研究支援（5 コース）の全講座をオンライン開催した（表 1. 看護職学習支援公開講座開催実績参照）。

公開講座をオンライン開催のみで実施するにあたり、第 1 回講座の運営担当者が中心となって運営マニュアルを作成し、実施結果に基づき修正し次回の運営担当者に引継ぎ、運営方法の洗練を図った。受講者には講座学習資料とともにオンライン会議システム Zoom の使用手順を示した資料を送付した。また、講座当日の電話対応窓口を整えた。全 5 回を通じて公開講座の実施に影響する運営側の通信障害は発生しなかった。受講者のうち、オンライン会議システム Zoom の利用に関する問い合わせはなかった。全受講者延べ 92 名のうち 1 名にマイク接続に問題が発生したが、受講者側の使用機器を変更して解決した。

看護研究支援「看護研究のテーマをみつけよう」「看護研究方法の理解」「研究計画書の書き方」「研究の実践に向けて；相談会」の 4 講座は、本学の石田和子先生に担当していただいた。受講者から「臨床の疑問から研究テーマにつなげる視点がわかった」、「研究活動の流れが明確になった」、「実施した研究からの具体例が多く、わかりやすい」、「現在取り組んでいる研究にすぐ役立つ」、「期待していた内容が学べた」との感想が寄せられた。研究に取り組む看護職にとって具体的な相談の場となるよう意図した「研究の実践に向けて；相談会」では受講者数が少なかったが「直接指導が受けられてよかった」「他の受講者の取り組みや質問を通して学べる内容が多かった」と好評だった。石田先生が担当された講座を複数受講した受講者から「同じ先生から続けて指導を受けられてよかった」との声が寄せられた。

本学の永吉雅人先生に担当していただいた看護研究支援「わかりやすいプレゼンテーション」の講座では、Microsoft PowerPoint を用いた発表用スライド作成演習を含む講義が行わ

れた。受講者から「スライド作成は難しく苦手だったが、コツがつかめた」、「実際に作成してみて理解が深まった」、「今後も活用できる」と好評だった。

全ての公開講座終了時に受講者アンケートを実施した。今年度は公開講座のオンライン開催に伴って Google フォームによる無記名の Web アンケートとして実施した。受講者アンケートの実施は各講座終了時に案内して協力を依頼し、アンケートフォームの URL を提示した。回答率は 67~100%で、受講講座の満足度は総じて高かった。

今年度初めてオンライン開催のみで実施した公開講座は、新型コロナウイルス感染症の収束が見通せない中でも、受講者の期待に応える内容を提供することができ、看護職のリカレント教育の推進に有用であった。感染対策を要する日常生活の長期化によってオンライン会議システムの利用が普及しつつあり、インターネットにアクセスできる場所を受講者が選んで参加できる利便性も好評だった。公開講座をオンライン開催のみで行う場合は、演習を伴う学習内容が制限されるが、看護実践に活用できる内容の学習機会を継続して提供できるよう検討する必要がある。次年度も全ての公開講座をオンライン開催で行うこととし、看護研究支援に加えて、看護実践に活かす公開講座の再開に取り組む。

表 1. 看護職学習支援公開講座開催実績

区分	講座名	開催日	受講者数	金額	講師
看護研究支援 5コース	さあはじめよう看護研究① 「看護研究のテーマをみつけよう」	5 月 22 日(土) 13:00～16:00	29	1,000 円	新潟県立看護大学 教授　石田和子
	さあはじめよう看護研究② 「看護研究方法の理解」	6 月 26 日(土) 13:00～16:00	21	1,000 円	新潟県立看護大学 教授　石田和子
	さあはじめよう看護研究③ 「研究計画書の書き方」	7 月 10 日(土) 13:00～16:00	20	1,000 円	新潟県立看護大学 教授　石田和子
	さあはじめよう看護研究④ 「研究の実践に向けて；相談会」	9 月 4 日(土) 13:00～16:00	6	1,000 円	新潟県立看護大学 教授　石田和子
	さあはじめよう看護研究⑤ 「わかりやすいプレゼンテーション」	10 月 26 日(火) 10:00～12:00	15	1,000 円	新潟県立看護大学 准教授　永吉雅人

2．どこカレ通信

どこカレ通信は、「どこでもカレッジプロジェクト」のメイト（「どこでもカレッジプロジェクト」でともに学習する看護職の方々の呼称で、所定の申請書の提出により登録された会員）に向けて、公開講座やバーチャルカレッジを周知する目的で発行している。

看護職学習支援公開講座の開催に併せて例年は年 3 回発行していたが、今年度は公開講座数が少ないため、年 2 回の発行とした。主な内容は、終了した公開講座の開催状況の紹介、今後開催する予定の公開講座の案内を中心に、地域課題研究の公募や研究発表会の案内、メイト登録の案内等を掲載した。どこカレ通信の発行実績の詳細は別表（表 2　どこカレ通信

発行実績一覧）に示した。48 号（資料 1 参照）は、地域課題研究の広報を目的に県内看護職が就業する 871 施設に送付した。49 号（資料 2 参照）は、活動を広報するため県内の病院 125 施設の看護部長宛に送付した。どこカレ通信は紙面発行のほか、本学リポジトリに収載して本学ホームページで公開している。

表 2　どこカレ通信発行実績一覧

	号名	発行時期	送付部数	主な内容
1	48	8 月	966	終了した公開講座の紹介と今後のご案内、地域課題研究・上越地域看護研究発表会案内、メイト募集とバーチャルカレッジの案内
2	49	11 月	236	終了した公開講座の紹介、地域課題研究公募、メイト募集とバーチャルカレッジの案内

３．バーチャルカレッジ

今年度は、公開講座の講師より協力を得て 1 本の動画教材を作成した。10 月 26 日(火)開催の看護研究支援「わかりやすいプレゼンテーション」（講師：永吉雅人 本学准教授）である。今年度の公開講座はオンライン会議システム Zoom を使用して開催したため、動画教材化を目的として録画することについて受講者に説明して承諾を得た。

2021 年度の公開講座受講者（92 人）のアンケート結果によると、アンケートに回答した 76 名のバーチャルカレッジ利用状況は、「よく利用している」1 名、「たまに利用している」7 名(9%)で、「見たことがない」34 名（45%）であった。次年度はバーチャルカレッジに収載する動画教材の作成を継続するとともに、バーチャルカレッジの在り方を検討する。

４．その他

1）メイト獲得に向けた取り組み

公開講座参加者にメイト募集を案内して周知を図った。今年度のメイト新規登録は 18 名、2022 年 1 月末時点の登録数は 112 名である。メイト登録は 2 年ごとの更新制である。更新年度を迎えた 25 名に対して 11 月に更新案内を送付したが、2022 年 1 月末時点の更新数は 0 名である。メイト登録はバーチャルカレッジの利用に必要な手続きであり情報システムの管理上更新制で運営している。次年度は、公開講座開催時のメイト募集案内と看護職学習支援公開講座のメイト先行申込特典を継続し、メイト登録数の増加に向けて取り組む。

2）広報活動

看護研究交流センター案内（ガイドブック）の発送、本学ホームページへの公開講座開催案内の掲載、病院や施設へのチラシの送付など、積極的に情報を公開した。公開講座開催時には、受講者に向けてバーチャルカレッジとメイト登録の案内、次回の公開講座の紹介を行い、公開講座終了後の受講者アンケートにも設問を設定した。

資料 1－どこカレ通信 48 号

Niigata Research
Institute of Nursing

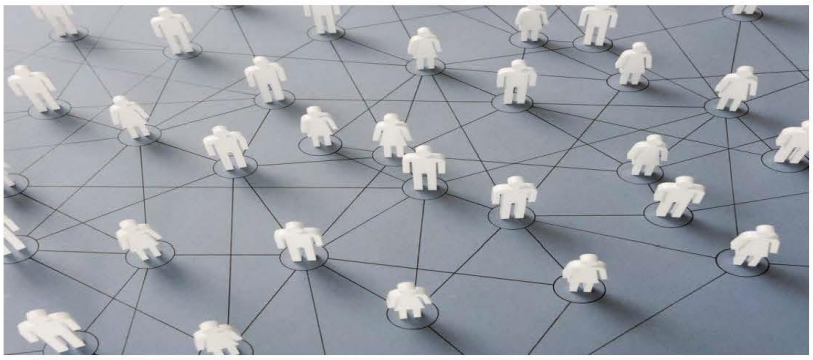
どこカレ通信

第 48 号
2021. 8発行

e-mail nirin@niigata-cn.ac.jp　Tel 025-526-2822

看護職学習支援公開講座

2021 年度　第 1 回から第 3 回公開講座の状況をお伝えします。



講座開催日

第 1 回　5 月 22 日（土）
第 2 回　6 月 26 日（土）
第 3 回　7 月 10 日（土）

講師

成人看護学
石田和子教授

研修方法

今年度から初めてオンライン方式での研修を開催しました。参加者の方々は、自宅や勤務施設から Zoom を使って参加していただきました。

看護研究支援コース：テーマ「さあはじめよう看護研究」
【参加状況】
第 1 回「看護研究のテーマをみつけよう」 30 名
第 2 回「看護研究方法の理解」 21 名
第 3 回「研究計画書の書き方」 20 名

参加者の感想・アンケートをまとめてみました

【講義の内容について】
・研究の知識を得る機会が無かった（勤務先に研究指導者がいない、研究が浸透していない等のため）ので、学習の機会が得られた。
・研究について初心者なので専門的用語などが難しく感じた。
・学生の時に行った研究から時間が経ち、忘れていたことの復習になった。
・物事を客観的に分析し、日々の看護実践に役立てるための研究の必要性や、大学院進学の必要性について考える機会となった。
・研究テーマ、文献検索の重要性を感じたので、見直しをしようと思う。
・講師の行った研究例や経験を聞くことで、臨床での疑問からテーマを見つけていく理解が深まった。
・看護研究を久しぶりに行うが、テーマ決定の参考になった。
・病棟単位で研究にとりかかっているが、リアルタイムで聞くことができ指導に役立てられる。
・看護研究を始める段階の考え方の整理ができた。

【オンライン方式の研修について】
・ほぼ問題なかった。初めての Zoom だったが、案内資料がわかりやすく、問題なく受講できた。
・こちらの画像もあり受講している感じがした。
・質問したかったが、操作がうまくいかず、手上げのみになってしまった。また、参加してみようと思う。
・自宅から 1000 円で受講できるのはお得な研修だと感じた。

【担当者より】 初めてのオンライン研修でした。3 回とも Zoom を使用しましたが、大きな問題もなく開催できました。休憩の取り方なども、回数を重ねる毎にスムーズになりました。みなさん熱心に参加くださいました。

公開講座参加者の背景

★全ての回で、最も多いのは新潟市在住の方、他に愛知県や長野県など、他県からの参加者もいらっしゃいました。

★全員が現職であり、ほとんどが看護師です。他に看護教育機関の教員、保健師、助産師数名の参加がありました。

★講座を知った理由の主なものは、郵送されたチラシであり、HP の閲覧は少数でした。

（ウラ面あります）

10 月 2 日(土)に地域課題研究発表会を予定しています 。
実施できなかった昨年度分も含めた発表を行います。
(同時開催:上越地域看護研究発表会)

【地域課題研究とは】

看護職者が看護実践場面で感じている課題を、本学教員の指導を受け、研究計画の立案から始めます。1年半の研究期間があり、1 件につき、上限 10 万円の研究助成費を使うことができます。

【今年度の発表会】

右は、今年度行う研究発表会の案内チラシです。オンライン参加ができます(予約要)。

★★★

是非、看護研究支援コースを受講し、地域課題研究に繋げましょう

★★★

★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★

「どこカレメイト」に登録しませんか？

★どこカレメイトになると、何ができるの？

現職、潜在看護職のリカレント教育(社会人がさまざまな形で学ぶこと)を推進するもので、メイト登録(無料)をしていただくと、インターネットが使える場所ならどこからでも、パソコンや携帯電話を使い動画教材を閲覧することができます。

<u>教材の内容</u>: 教員、外部講師、専門・認定看護師が行った公開講座や大学院の授業内容などを動画にしています。

【お手続き】

HP)　県立看護大学→看護研究交流センター→メイト会員募集

または、直接、看護研究交流センターまでお問い合わせください。

★今後の看護職学習支援公開講座予定

第4回: 9月　4日(土)「看護研究相談会」　13:00 ～16:00

第 5 回:10 月 26 日(火)「わかりやすいプレゼンテーション」　10:00 ～12:00

資料 2－どこカレ通信 49 号

どこカレ通信

第 49 号　2021.11 発行

【新潟県立看護大学看護研究交流センター】

e-mail　nirin@niigata-cn.ac.jp　Tel　025-526-2822

今年度の公開講座を終了しました

看護研究支援コース　第４回講座

さあはじめよう看護研究④

「研究の実践に向けて；相談会」

開催日：令和３年９月４日(土)13:00～15:00

講師　新潟県立看護大学　　石田和子教授

参加数：６名　（新潟市・三条市・長岡市）

【参加者アンケートからの感想】

・私の年代は看護教育も十分でなく、院内外の研修等で自己研鑽してきました。後進の育成のために努力してきましたが、大変苦労しました。今まで受講できなかった講義をオンラインで聴講できこのような機会に感謝しています。

【講座の進行を担当した教員からの感想】

・事前に配付した“研究整理シート”がまとめられており主体的に参加することができていました。このコースに初参加の方が２名おられたが計画内容を相談することができていました。

看護研究支援コース　第５回講座

さあはじめよう看護研究⑤

「わかりやすいプレゼンテーション」

開催日：令和３年 10 月 26 日(火)10:00～12:00

講師　新潟県立看護大学　　永吉雅人准教授

参加数：15 名（新潟市・柏崎市・糸魚川市・小千谷市・上越市）

【参加者アンケートからの感想】

・私にとってパワポ作成は高い壁です。先生の講義が非常にわかりやすく、この学びを活かして新たに作成してみようと思います。堅苦しくなく質問しやすい環境でした。

・大変わかりやすい、今後に活かせる講義内容でした。

【講座の進行を担当した教員からの感想】

・15 名の看護職の参加があり、Web 開催でしたが、実際に PowerPoint を作成する演習も行われ、作成したものを共有し、各自が学びを得られていました。現在看護研究に取り組まれている方が多く参加されており、発表の際に、本講座の学びを活用していただけると思います。

２回を通じ、その他のご意見、ご感想

・予めオンラインの操作についての解説資料が届き、滞りなく受講できました。

・個人的には、もっと顔出しをしたかったのですが勇気がでなくてすみません。通信状況は問題ありませんでした。

・遠隔で参加できる公開講座は大変ありがたいです。

♥♥バーチャルカレッジに、新しい教材２本をアップしました。是非、ご視聴下さい♥♥

日本の社会経済格差と子どもの食・栄養―実態調査から

新潟県立大学人間生活学部健康栄養学科

教授　　村山伸子先生

わかりやすいプレゼンテーション

新潟県立看護大学情報科学

准教授　　永吉雅人先生

1

「どこカレメイト」に登録しませんか？

現職、潜在看護職のリカレント教育（社会人がさまざまな形で学ぶこと）を推進するもので、メイト登録（無料）していただくと、インターネットが使える場所ならどこからでも、パソコンやスマートフォンを使い動画教材をご視聴いただけます。

本センターが開催した講座の中から、視聴覚教材化した動画を視聴できます。

【ホームページよりお手続きの方】

本大学 HP → 看護研究交流センター → メイト会員募集→メイト登録書類

【説明をお聞きになりたい方】

直接看護研究交流センターまでお電話ください。

2022 年度地域課題研究にご応募下さい

With コロナの時代は、かつて経験したことの無いことが次々とおこり、病院、施設、地域、教育、行政、企業等のさまざまな場面に新たな問題や課題が発生しています。現場における疑問や不安の多くは「看護研究」として取り組むことで解決の糸口を見出すことができます。なんとかしたいという課題をお持ちであれば、是非ご応募ください。研究計画書の作成は、本学の教員が一緒に行います。

【募集テーマ】新潟県内の看護実践上の問題・課題に関する研究課題全般

【対　象　者】新潟県内の看護実践に関わる看護職とし、本学教員が共同研究者となります。

【研 究 期 間】2022 年 4 月～2023 年 9 月末

【公 募 期 間】2021 年 9 月～11 月末

【研究助成費】1 件あたり 10 万円を上限

【応 募 方 法】2022 年公募要領（各病院、施設、在宅、学校、行政等に配布すみ）または、ホームページ（https://www.nirin.jp/）をご参照ください。

締め切りが迫っていますが相談に応じます。
迷っている方は看護研究交流センターまでご連絡下さい。

2

地域課題研究開発部門

原等子、石原千晶、安達寛人、谷内田潤子、上田恵、坂田智佳子

Ⅰ　本部門の事業目的

新潟県の保健・医療・福祉分野で働く看護職の実践現場における研究活動を支援することを通して、新潟県の看護の質向上をめざす。

Ⅱ　活動状況

１．県内の看護研究の取り組み支援

１）地域課題研究推進

公募要領を改訂し研究期間をおおよそ 1 年半としたが、新型コロナウイルス感染症の影響により研究活動が休止となったり、やむなく中止する状況となったり、2020 年度の研究発表会は開催できなかったりと、想定外の状況がこの 2 年間続いている。

2021 年度の研究公募は、14 件と例年に比べ多くの申請があり 12 件を採択した。これは、第 1 段階の申請内容を簡便にしたことによる。また、2020 年度助成の 2 件が研究期間の延長を申請していたが継続困難と判断し辞退、2021 年度分も 2 件が辞退された。このような状況下であるからこそ、看護の質を担保するために研究活動を行う意義があると思われるが臨地状況の厳しさが続いている。

2021 年 10 月の地域課題研究発表会には、2019 年度の助成分を含めた 11 件（2019 年度分 6 件、2020 年度分 5 件）の研究報告が本学教員の支援を受けて提出され、口頭発表を行った。

2022 年度の地域課題研究は、公募を 2021 年 9 月 1 日（水）から 11 月 30 日（火）で実施したが、応募数が少なかったため 12 月 15 日（水）まで公募期間を延長し 6 件の応募を得た。

新型コロナウイルス感染症の蔓延状況は、2021 年秋には大分落ち着いてきていたが、各病院等でのコロナ感染症への対応は長期にわたり、研究に取り組む体力を奪っているようでもあり、募集の呼びかけに対しても厳しい状況が垣間見えた。

２）地域課題研究発表会の開催

2021 年 10 月 2 日に、2019 年度助成分と 2020 年度助成分を併せて地域課題研究発表会を開催した。感染状況の地域差や参加者の利便性を考慮し、ハイブリッド（オンラインと対面の併用形式）で実施した。また、これまで午前に発表を開催していた上越地域看護研究発表会（2019 年度は示説）を、一つの学術集会の分科会を構成するイメージで地域課題研究発表会と同時に開催し、参加者がどちらの発表会にも参加しやすくなるよう工夫した。その結果、地域課題研究発表会に参加せずに帰っていた上越地域の参加者も発表を聞くことができ看護研究の質の向上を図るために大いに刺激になったようである。

２．上越地域看護研究発表会の開催（地域課題研究発表会の開催との併催）

上越地域看護研究発表会は、新潟県上越地域振興局健康福祉環境部と上越地域の 7 病院の

看護職および当部門のメンバーが参加し、実行委員会を構成している。会議は、5 月 10 日、7 月 6 日、11 月 9 日に実施した。上越地域看護研究発表会は 7 件の応募があり、査読を当部門員で行い、修正を経て 10 月 2 日(土)の発表会で口頭発表を行った。

ハイブリッドでの開催は、主催側、発表者、参加者ともに機器の操作の習熟が必要であったため、マニュアルを作成したうえで発表会前々日と前日に操作のデモンストレーションを実施した。また、発表会後の閲覧ができるよう発表の録画画像（アーカイブ）を作成し、本学の学習管理システム「どこでもカレッジ」（どこカレ）で期間を限定し公開した。当初公開期間は 10 月中の 2 週間としたが、希望により 2 週間延長した。

発表会にはオンラインで 24 名、会場参加で 53 名の参加があった。アーカイブの視聴は 1 演題につき 2～15 回（地域課題研究 2～9 回、上越地域看護研究 9～15 回）であった。どこカレのアカウントを事前配付した人のみの視聴であり、発表者の関係者等が視聴したと思われる。参加者アンケート（37 件回収）は、2 つの発表会の併催について 90%が適切だったという評価であった。また、今後もハイブリッド開催の希望が多く、オンデマンドによるアーカイブで視聴できることがよかったなどの意見もあった。

発表者への周知連絡を円滑にするために、どこカレメイト登録を勧め、参加者にはどこカレメイトの一時アカウントを発行した。慣れない登録方法等の煩雑さから使いにくいという意見もあったが、知的財産のアーカイブ公開は限定的であるべきと合意を得て、今後もどこカレを活用していくことが検討された。また、ハイブリッド開催の機器操作の不手際等が多かったことから、スムースな展開の仕組みについて検討していくことが課題として挙がった。

Ⅲ．事業の評価と今後の課題

新潟県、特に上越地域の看護の質向上に寄与する本事業の意義は大きい。上越地域看護研究発表会と地域課題研究発表会の併催およびハイブリッド開催、アーカイブ視聴の実施は、感染流行下においても、また平時にも多忙な看護職の参加を促す意味でも、本学の地域的な特性を踏まえても有意義であり、今後はこの方法が定着していく可能性が高い。そのためにもオンライン環境の整備を行い、利便性を向上させることが、本学、看護研究交流センターの活動を継続していくためにも重要である。

2021 年 10 月 2 日 発表会閉会式後 オンライン参加者も交えて記念撮影

第 11 回上越地域看護研究発表会
2019・2020 年度地域課題研究発表会

合同発表会プログラム

令和 3 年 10 月 2 日（土）　13:00～15:30　（開場 12:30）

会場：県立看護大学第 1・第 2 ホール（会場参加 & オンライン参加）

主催：新潟県上越地域振興局健康福祉環境部　新潟県立看護大学看護研究交流センター

第 1 ホール	第 2 ホール
12：30　開場、Zoom 参加者入室可 **13：00　開会式**：上越地域振興局健康福祉環境部部長・新潟県立看護大学学長あいさつ（第 2 ホール）	
（会場移動）	
演題発表【A-1 群：上越地域看護研究】 **13：20～14：10** **座長: 丸山孝子(知命堂病院)** 演題 1：取組紹介　内田絵里奈（県立中央病院） 放射線治療を受ける患者の治療プロセスに対するイメージ化を助けるオリエンテーション用紙の検討 演題 2　倉本貴幸（常心会川室記念病院） 火災時アクションカードを使用したシミュレーションの効 –病棟スタッフの防災意識の向上と不安感の軽減を目指して– 演題 3　小林裕美（厚生連上越総合病院） 認知症高齢者の行動・心理症状へのケア介入の振り返り 演題 4：実践報告　岩﨑美月（新潟労災病院） 認知症を持つ患者の看護 ～行動を抑制せずに欲求を満たしていく関わりを通して～	**演題発表【B-1 群：地域課題研究】** **13：20～14：30** **座長：岡村典子（新潟県立看護大学）** 演題 1　塩谷幸祐（さいがた医療センター） アロマ精油の吸入が交感神経・副交感神経に及ぼす影響 演題 2　西山まゆみ（長岡赤十字病院） 化学放射線療法を受けた咽頭癌患者の栄養管理への介入 ～入院時から退院後を見据えた関わりを通して～ 演題 3　松井ルミ子（県立中央病院） 開心術後の患者に対する早期リハビリテーションの効果 演題 4　南雲良美（魚沼基幹病院） 新人看護師対象「急変対応シミュレーション」研修受講後の成果 演題 5　山田菜未（長岡赤十字病院） 出生直後から Family Centered Care の介入を受けた超早産児の母親が抱く思い 演題 6　霜垣美由紀（北里大学保健衛生専門学院） 新人看護職員における夜勤開始前の不安
お知らせ・休憩 10 分　（14:10～14:20）	**お知らせ・休憩 10 分**　（14:30～14:40）
演題発表【B-2 群：地域課題研究】 **14：20～15：10** **座長：原　等子（新潟県立看護大学）** 演題 7　涌井幸恵（県立中央病院） 3 次救急医療施設における一般病棟での急変事例の現状分析–早期警告スコア（National Early Warning Score）を用いた後方視的調査から– 演題 8　南雲敬子（長岡赤十字病院） A 地域輪番病院における、ACP 認知度に関する実態調査 演題 9　田巻康弘（介護老人保健施設ケアホーム三条） 手洗い研修により介護職員の手洗いが習慣化するかの検証 ～A 介護老人保健施設における感染予防への取り組み～ 演題 10　木村恵美（長岡赤十字病院） 当院救急外来看護師による入院せず帰宅する患者に対する指導の現状と課題 演題 11　渡辺沙織（さいがた医療センター） A 病院における、暴力対応知識の現状把握–「患者からの暴力に対する対応知識チェックリスト」を用いて–	**演題発表【A-2 群：上越地域看護研究】** **14：40～15：10** **座長：古川春樹（川室記念病院）** 演題 5　竹田瑞樹（さいがた医療センター） 医療観察法病棟における消灯時間変更がもたらす効果と影響 –対象者と看護師の双方の視点から– 演題 6：実践報告　水澤真由美（県立中央病院） 新型コロナウイルス感染症病棟における看護実践報告 演題 7：実践報告 小山とし江（介護老人保健施設くびきの） ～快適な排便へ～栄養剤を変更した 3 事例の報告
15：20　閉会式：看護研究交流センター長あいさつ（第 2 ホール）	

「上越タイムス 2021 年 10 月 6 日 15 面掲載」

発表会の様子

入口サーモカメラ

受付

2021年（令和3年）　10月6日（水曜日）

看護や地域課題テーマに

職員や大学教員　研究成果を発表

県立看護大

18人がそれぞれの研究成果を発表した

県や上越市の看護職員・大学教員らが研究の発表、報告を行う「上越地域看護研究発表会」「地域課題研究発表会」が9日、同市新南町の県立看護大で開かれた。コロナ禍の影響で昨年は中止となり、2年ぶりの実施。感染予防対策で会場とウェブ配信を併用し、約60人が参加した。

県上越地域振興局健康福祉環境部、同大看護研究交流センターが主催。看護研究や実践報告、実践上の課題解決に向け取り組んだ共同研究などの発表を通じ、「より良い看護の創造」を目指す。同日は両会合わせて18題の発表が行われた。

「上越地域看護研究」では、常心会川室記念病院の倉本貴幸さんが、災害時に職員が果たす役割をまとめた「災害アクションカード」の導入シミュレーション結果を発表。これにより「職員が災害に対する知識不足を自覚することにつながり、防災意識向上のきっかけになった」と話した。

「地域課題研究」では、さいがた医療センターの塩谷幸祐さんが、アロマ精油の吸入による影響について発表。4種類のアロマ吸入により交感神経と副交感神経いずれが優位になるかを実験した結果、種類による差はなかったが、香りに対する好き嫌いにより有意な低下・上昇が見られたという。「本研究は短期的な状態を評価したもの。アロマテラピーの長期的効果などを継続する必要がある」と締めくくった。発表の様子は10月末までオンデマンドで公開する。

上　主催者挨拶の様子
左上　オンライン発表の様子
左　会場発表の配信の様子

2021 年度地域課題研究一覧

No.	申請代表者	テーマ	所属	学内責任者 共同研究者
1	齊藤千恵子	A 病院の新人看護師がリアリティショックを乗り越えた要因	厚生連糸魚川総合病院	石田和子
2	清水　博美	多職種協働で立ち上げた認知症ケア委員会の取り組み	新発田リハビリテーション病院	原　等子
3	本田ひとみ	関節リウマチ患者における手洗いの実態調査	県立リウマチセンター	酒井禎子
4	本山　和樹	虚血性心疾患を併発した糖尿病患者の療養生活への思い	長岡赤十字病院	小林綾子
5	皆川みどり	外来透析に通院する高齢患者の透析継続における困難と取り組み	長岡赤十字病院	樺澤三奈子
6	赤川　美穂	臓器提供時の各段階における必要な看護を明らかにする　～家族への看護を振り返って～	長岡赤十字病院	高橋絹代
7	石川　真彩	精神急性期病棟における睡眠改善に向けた取り組み	さいがた医療センター	安達寛人
8	土屋　　尚	整形外科疾患を持つ患者の就労支援に対するニーズ	新潟労災病院	酒井禎子
9	佐藤予右子	高齢患者の終末期における治療と人工栄養に関する意思決定支援の現状と課題　-地域包括ケア病棟に勤務する看護師に焦点を当てて-	上越地域医療センター病院	小野幸子 河原畑尚美
10	水澤三津江	当院の退院支援の評価からみえた課題　-退院支援評価表を分析して-	新潟労災病院	大久保明子
11	内田絵里奈	三次救急を担うA病院におけるがん放射線療法看護の現状	県立中央病院	酒井禎子
12	斎藤真樹子	人生最終段階と説明を受けた患者の家族などの代理決定者の葛藤	総合リハビリテーションセンター みどり病院	前川絵里子

2022 年度地域課題研究一覧

No.	申請代表者	テーマ	所属･Mail	学内責任者 共同研究者
1	武田　一久	透析患者を受け入れる介護施設の現状と課題　ー介護施設との連携を考えるー	医療法人渡辺内科医院	東條 紀子
2	関　真和	看護師が身体抑制の実施を判断する要因について	長岡赤十字病院	原　等子
3	桑原香菜子	酸素療法使用中の耳介に発生する MDRPU の予防に関する患者の工夫と実際	長岡赤十字病院	石岡　幸恵
4	米持　純子	当院のコロナ専用病棟に勤務する看護師の身体的･精神的影響に関する実態調査	新潟県立中央病院	岡村　典子
5	吉村登紀恵	40～60 歳までの骨粗鬆症維持スクリーニングとしての FREX の有効性を A 病院の女性看護師の骨密度検査結果と比較し、明らかにする	新潟労災病院	酒井　禎子
6	高橋　恵美	病棟の本質的問題を明らかにする	厚生連上越総合病院	伊豆上智子

Ⅲ．事務局報告

出　前　講　座

出前講座は、平成26年度より地域貢献活動の一環として始めた事業である。

Ⅰ　目的

・本学教員が地域に出向くことで大学を身近に感じてもらう
・本学教員の研究成果等を地域へ還元する
・地域住民への生涯学習の機会を提供する

Ⅱ　令和3年度　出前講座テーマ一覧

No	テーマ	分野/職名/講師名
1	がんになった親と子どものサポート～子どもに親のがんを伝えること～ [概要] がんと診断された時に子育て中の親御さんがたくさんいます。親のがんを子どもに伝えたほうがいいのか、親が子どもに伝えるときの留意点、がんの親をもつ子どものサポートについてお話します。	小児看護学 教授 大久保明子
2	いざというときに役立つ“子どものホームケア”	小児看護学 教授 大久保明子
3	子どもの危険！“事故予防と応急手当” [概要] 乳幼児に起こりやすい事故やけがの予防対策と、すり傷、やけど、鼻血、頭を打った、誤嚥など、日常生活で起こりやすい事故やけがの応急手当についてお話しします。	小児看護学 教授 大久保明子
4	自分のからだ・健康・いのちについて考えてみよう！ [概要] 聴診器を使った看護体験、乳児人形を使ったおむつ交換の体験、がんの予防、喫煙や飲酒の害、小児がんの子どもの体験などから、健康やいのちについて考える授業です。	小児看護学 教授 大久保明子
5	医療・看護英語の学び方（基礎編） [概要] 今日、グローバル化の進展に伴い、医療・看護の現場でも英語力が求められる時代になっています。医療・看護英語の学び方について様々なアイディアや最新の情報を提供します。	情報科学 教授 中村義実
6	認知症のこと知りたい（入門編） [概要] 認知症について、最近テレビや新聞でも話題だけど、認知症になったらどうなるの？地域で暮らし続けるためにはどうすればいいの？認知症を予防すること、早期診断、治療についてわかりやすく解説します。	老年看護学 准教授 原　等子
7	認知症への対応を知りたい（初級編） [概要] 認知症の人が周りにいるけれど、認知症の人が穏やかに、看ている私も穏やかに生活する知恵が知りたい。近隣のトラブル回避の秘訣、認知症の症状理解を深め対応するコツなどをわかりやすく解説します。	老年看護学 准教授 原　等子
8	認知症という病気についてもっと知りたい（中級編） [概要] 認知症という病気はたくさんの種類があります。それぞれの特徴や対応の仕方などについて、詳しくわかりやすく解説します。 入門編の内容は理解している方向けの内容です。	老年看護学 准教授 原　等子

9	新型コロナウイルス感染症で影響を受けた”こころ”の語り場 [概要] 新型コロナウイルス感染症の影響で、傷ついたり、失ったもの、あるいは新たに得たものについて自由に語り合い、ジャッジしたり非難したりせず、話題提供者が、あいまいな喪失のプロセスを解説し、今の自分自身の“こころ”の在り方に触れる。	小児看護学 准教授 山田恵子
10	コロナ禍における日用品を代用した応急手当 [概要] コロナ禍の中でも、怪我や出血、熱傷、けいれん発作など、様々な健康障害は時や場所を選ばずやってきます。そうした時に第一発見者（ファーストレスポンダー）の役割はとても重要です。 日用品で感染予防策を講じ行う応急手当を提案します。	小児看護学 准教授 山田恵子
11	障害を抱えて生活する家族との語り場 ―新型コロナウイルス感染症による新しい生活様式への共存― [概要] 今般の目に見えないウイルスとの戦いに世界中が疲弊しています。特に障害を抱えて生活する方や家族にとって感染症は重篤な危険をはらんでいます。手指消毒剤や医療物品、薬品の手配な ど新しい生活様式への共存を一緒に考えます。	小児看護学 准教授 山田恵子
12	保育所や学校などにおける体調不良の子どもへの対応 ―新しい生活様式における観察や対応の仕方― [概要] 乳幼児や学童に携わる先生方とコロナ禍における子どもの体調不良時の対応について、感染予防と観察の観点からお話ししたいと思います。できるだけ参加型で先生方と一緒によりよい工夫を考える時間にしたいと思います。	小児看護学 准教授 山田恵子
13	人と人との距離を知る [概要] 知的障がいや発達障がいのある児童・生徒や小学校低学年の児童のなかには、自分と他人との距離感をつかむことが苦手な児童･生徒もおります。 グループワークを通じて、人と人との距離を学 ぶ講座です。	精神看護学 講師 舩山健二
14	こころを病むってどういうこと？ [概要] うつ病に焦点をあててお伝えします。うつ病を持つ人にどのように接するか、気をつけるポイントや治療について看護の視点からお話しします。	精神看護学 助教 安達寛人
15	ハマるってどういうこと？ [概要] 嗜癖（しへき）についてのお話です。ギャンブルやゲームなどで日常生活に支障がでるほど「ハマる」とはどういうことなのか、対策としてどのような方法があるかなどお話しします。	精神看護学 助教 安達寛人
16	危機の分析と看護介入～乳がん再発時の患者の心理～ [概要] 乳がんを再発した患者さんの体験に基づき、危機の分析と危機看護介入について解説します。	成人看護学 准教授 樺澤三奈子
17	新たながん看護介入の探索：がん患者に対する運動介入とその効果 [概要] 今日、がん患者にとっての運動効果が様々に検証されています。がん患者に対する運動介入とその効果のレビュー結果を通して、新たながん看護介入の可能性を探る講義です。	成人看護学 准教授 樺澤三奈子

18	薬物依存症 [概要] 薬物依存症や薬物依存症者の回復支援について、考えるための講義です。講義内容については、ご依頼者からのご要望に応じ事前相談の上、決めさせていただきます。	精神看護学 講師 船山健二
19	高齢者と犯罪 [概要] 我が国における犯罪は減少している一方で、高齢者による犯罪は増加しています。高齢者による犯罪の実態と背景、看護職、福祉事業従事者、行政職員が知っておきたいポイントについて、お伝えします。	精神看護学 講師 船山健二
20	グリーフケアとしてのエンゼルメイク [概要] 家族と共に、その人らしい穏やかな表情を作ります。 エンゼルメイクは、家族のグリーフケアに繋がり、病院での最後の時間をとても優しい時間に変えてくれます。実践が直ぐにできるように、講義と実技を合わせて体験します	成人看護学 助教 高橋絹代

Ⅲ　令和3年度　出前講座実績（開催順）

実施件数16件　合計366人

	開催日	テーマ	講師名	依頼主	参加人数
1	6月29日 (火)	子どもの危険！ “事故予防と応急手当”	大久保明子	下門前保育園	23
2	7月13日 (火)	認知症への対応を知りたい （初級編）	原　等子	東城二長寿会	18
3	7月27日 (火)	認知症のこと知りたい （入門編）	原　等子	名長会	29
4	8月3日 (火)	コロナ禍における日用品を代用した応急手当	山田恵子	上越市社会福祉協議会板倉支所	17
5	8月7日 (土)	認知症のこと知りたい （入門編）	原　等子	南三世代交流プラザ運営協議会	53
6	9月12日 (日)	認知症のこと知りたい （入門編）	原　等子	JR東日本鉄道OB会直江津支部	40
7	9月16日 (月)	薬物依存症	舩山健二	上越地区協力雇用主会	28
8	9月21日 (火)	認知症のこと知りたい （入門編）	原　等子	浦川原地区公民館	15
9	9月21日 (火)	こころを病むってどういうこと？	安達寛人	上越市社会福祉協議会板倉支所	17
10	10月1日 (金)	いざというときに役立つ “子どものホームケア”	大久保明子	みんなでいきる児童養護施設　若竹寮	15
11	10月4日 (月)	いざというときに役立つ “子どものホームケア”	大久保明子	真行寺幼稚園	25
12	10月14日 (木)	認知症への対応を知りたい （初級編）	原　等子	名立地区民生委員児童委員協議会	16
13	11月11日 (木)	グリーフケアとしてのエンゼルメイク	高橋絹代	県立柿崎病院	12
14	11月26日 (金)	認知症のこと知りたい （入門編）	原　等子	上越市社会教育課 三和地区公民館	12
15	12月23日 (木)	こころを病むってどういうこと？	安達寛人	上越市名立地区民生委員児童委員協議会	25
16	1月28日 (金)	認知症という病気についてもっと知りたい（中級編）	原　等子	上越市社会福祉協議会大潟支所	21
				合計	366

令和３年度　出前講座アンケート結果（依頼者回答より要約）

実施件数：16 件（依頼件数：19 件）参加人数：366 人

テーマ/講師名	講座への感想
いざというときに役立つ“子どものホームケア” 講師：小児看護学教授 大久保明子	・当施設の機能や入所している児童の年齢構成等に配慮した内容であり、かつコロナ予防対策や食物アレルギー等、最新の情報を教えていただいた。また対処法だけでなく、理論や根拠から話してもらえたので（例：熱が上がる理由、嘔吐や下痢が怒る理由など）非常にわかりやすく必要以上の不安を感じなくてもよいという理解へと繋がった。 ・子どもの病気や対応についてわかりやすかった。コロナウイルスと子どもについても触れて下さり、保護者も大変興味深く聞き、個別の質問にも丁寧に答えていただいた。
子どもの危険！ “事故予防と応急手当” 講師：小児看護学教授 大久保明子	・具体的な応急手当の仕方を教えていただけた。新型コロナウイルスについて聞くことができた。
認知症の対応を知りたい （初級編） 講師：老年看護学准教授原 等子	・認知症になられた方が悩み苦しんでおられることを知り、私たちの何気ない言葉・態度が嫌な思いをさせていた気がする。これからは、改め考え直し、お互いに過ごしやすい生活が送れるようにしたいと思う。 ・講座を受けて自分なりに一歩進むことができた。 ・身近な話題であり興味があり勉強になった。認知症の本人と家族の関わりがよくわかった。普段からの生活が大事。 ・毎日の生活を見直すきっかけになった。 ・80 代に入り漠然とした不安に襲われていたが、話を聞いて安心した。 ・半数以上は高齢者だったので、もう少しゆっくり進めてほしかった。資料が多くついていくのが大変だった。 ・参加者は地域町内会の高齢者だった。認知症の病気、主な症状、家族の思い、予防の重要性などについて説明をいただいた。脳の活性化のために、人と人の繋がりや地域活動を通じた世代間交流の必要性について学ぶことができた。 ・老後の生活で気になるのは「他人に迷惑をかけたくない・かけるのではないか？」という不安。「認知症」に対してどのように自覚すればよいのか？というのも不安材料の一つだったが、原先生のわかりやすい解説、正しい生活習慣病の予防、「一人で悩まないこと」などを話して頂き、老後の生活の理解が深められた。 ・認知症という病気の特徴や症状について詳しく教えていただいた。認知症の人の思いや、認知症を理解する法則について具体的な話を聞き、認知症の人の思いや考えを間接的に知ることができた。以上から「共生」の大切さについて理解を深めることができた。
認知症という病気についてもっと知りたい （中級編） 講師：老年看護学准教授原 等子	・昨年の初級編に引き続き、原先生にご講義をしていただいた。 認知症とともに生きるための 8 か条の①「認知症の診断で人生は終わらない」という言葉が響いた。認知症になっても、今できることや楽しめることをしていくことが予防につながり人生の質を高める。認知症の方や介護をされている方が笑顔で過ごせる地域になるために考え、少しずつ実行できたらいいなと思った。

コロナ禍における日用品を代用した応急手当 講師：小児看護学准教授山田恵子	・ビニール袋やスカーフを止血や三角巾に使用する方法や、身近にある物品を使っての応急方法を教えていただき、とても勉強になった。 ・清潔なビニール袋をカバンに入れておくと役に立つことがわかった。
こころを病むってどういうこと？ 講師：精神看護学助教安達寛人	・こころの健康について知ることができた。さらに、うつ病の方に対する対応などについても、実際に接し方がわからず困っている参加者の質問に的確なアドバイスをいただき、今後の関わりについて知ることができて助かった。 ・最近、こころを病んでしまう方が多く周りにもいるので、関わり方や声掛けについてどうしたらよいか不安だった。今回このようなテーマで受講できとても参考になった。また、自分のコミュニケーションの取り方を見つめなおす機会となった。
薬物依存症 講師：精神看護学講師舩山健二	・保護観察対象者のうち、薬物に絡んだ人を雇用するケースは少ないが、上越でも増えつつあるといわれている薬物事件に関して、今後の活動に活かせるために貴重な知識・講義をしていただいた。
グリーフケアとしてのエンゼルメイク 講師：成人看護学助教高橋絹代	・実際にエンゼルメイクをしていただき、直ぐに実践できることが沢山あったので勉強になった。参加したスタッフからも、わかりやすかった、楽しい講座で良かったという感想が得られた。

◆出前講座についてのご意見・ご感想など、お気づきの点をご自由にお書きください。

・今回の初級編の学習を基に、さらに中級編を企画したい。
・このような講座があることを知らなかった。より多くの方々に知っていただくよう各方面に広報されたほうがいいと思う。
・今後も引き続き利用させていただきたい。思春期向けの子どもが理解できるような性に関する講座をお願いしたい。
・今後も継続して受講したい内容だった。質疑の時間をもう少し設ければ良かった。
・参加者から、次年度も健康づくりをテーマとした講話会の要望があるので、今後も専門家の講師の方からご指導をお願いしたい。
・テーマが毎年あまり変わらないので、年度によってテーマが変わっていくと良い。
・今回初めて「出前講座」を利用させていただいた。専門的な話をわかりやすく聞ける良い制度だと思う。今後も活用を図っていきたい。
・実技があると学びが深く楽しく受講できた。もっといろいろなお話が聞きたいと思った。
・専門家のお話を聞くことで、今後の生活に役立つ知識をいただき感謝している。
・限られた時間の中での講義で忘れてしまうこともある。継続開催が良いと感じた。
・心を病んでいる人との具体的なコミュンケーションの取り方が知りたい。早期受診が必要と思うが精神科受診のハードルが高く対応を知りたい。回復に時間がかかること、薬を飲めばすぐによくなるものでは無い事がわかり、このことを本人も周囲も認識することが回復への第一歩だと思った。

Ⅳ．令和３年度地域課題研究助成の報告

2019 年度地域課題研究

１．　塩谷　幸祐：さいがた医療センター病院

２．　小林　恵子：長岡赤十字病院

３．　西山まゆみ：長岡赤十字病院

４．　霜垣美由紀：北里大学保健衛生専門学院

５．　渡辺　沙織：さいがた医療センター病院

６．　本田　康裕：魚沼基幹病院

研究課題名

「アロマ精油の吸入が自律神経に及ぼす影響―精油の薬理作用と嗜好の関係性―」

1．研究代表者及び所属

代表者氏名：塩谷　幸祐　（　所属：国立病院機構さいがた医療センター　）

2．研究分担者氏名・（ 所属 ）

境原三津夫・（　所属：新潟県立看護大学　）

3．学内責任者

新潟県立看護大学 氏名：境原三津夫

4．研究助成金執行報告

（円）

予算額	100,000				
執行額	旅費	報償費	役務費	需用費	合計
	0	0	0	98,010	98,010

5．研究成果の公表

本研究は、2020 年度に行われた第 23 回日本アロマセラピー学会学術総会にて、e-poster による発表を実施した。

アロマ精油の吸入が自律神経に及ぼす影響―精油の薬理作用と嗜好の関係性―

○塩谷幸祐[1)]，境原三津夫[2)]
1）国立病院機構さいがた医療センター　2）新潟県立看護大学

○キーワード：アロマ精油，自律神経，HF nu(high-frequency power normalized unit)，LF(low-frequency power)，LF/HF

【目的】近年，アロマセラピーは医療現場において，実践されるようになってきた．しかしながら，その効果に関しては主観的な評価が中心で，科学的検証には工夫が必要である．このような中，心拍数の変動を解析することにより自律神経の状態（交感神経と副交感神経のバランス）を評価する研究がなされている．本研究では，この生物学的指標を用い，アロマ精油の吸入により自律神経の状態がどのように変化するか明らかにする．

【方法】対象は研究への同意が得られた健康成人 20 名とした．被験者はウェラブル心拍センサー（WIN フロンティア製）を装着し，仰臥位で 5 分間安静の後，アロマ精油を 1 滴（0.04ml）滴下したキッチンペーパーを顔にかけ仰臥位のまま 5 分間安静とした．続いてキッチンペーパーを取り除き，仰臥位のまま更に 5 分間安静とした．この過程を 4 種類のアロマ精油で実施した．終了後，アロマ精油の嗜好（好み，どちらでもない，嫌いの三択）について自己評価した．アロマ精油は，真正ラベンダー，ローズマリー・カンファー，イランイラン，グレープフルーツ（全て HYPER PLANTS 製）の 4 種類とした．データ収集後，吸入前 5 分間，吸入中 5 分間，吸入後 5 分間の LF/HF，HF nu の平均値をアロマ精油の種類別及び嗜好別にボンフェローニの多重比較検定を用いて統計学的に検討し，有意水準は 5%とした．なお，本研究はさいがた医療センター倫理委員会の承認を得て実施した．被験者には研究開始から終了まで 65 分かかることを説明し，同意を得た上で行った．

【結果】アロマ精油の種類別の検討では，種類に関わらず HR，HF nu，LF/HF のいずれの値も吸入前と吸入中，吸入中と吸入後の比較において有意差を認めなかった．アロマ精油の嗜好別の検討では，真正ラベンダーの香りを好む被験者は，HF nu 値が吸入中に有意に上昇し，吸入後に有意に低下した．一方，LF/HF 値は吸入中に有意に低下し，吸入後に有意に上昇した．また，イランイランの香りを苦手とする被験者は，HF nu 値が吸入中に有意に低下し，吸入後に有意に上昇した．一方，LF/HF 値は吸入中に有意に上昇し，吸入後に有意に低下した．

【考察】真正ラベンダーの香りが好みである被験者においては，吸入前と比較し吸入中に LF/HF が有意に下降し，また HF nu が有意に上昇していることから，精油を吸入することによって副交感神経が優位になったと考えられる．真正ラベンダーの香りが嫌いである被験者においては，このような現象を認めなかったことから，真正ラベンダーの吸入効果には，精油の生理的作用のみならず，香りに対する好き嫌いという情動面が影響している可能性が考えられる．一方，イランイランの香りが嫌いである被験者においては，吸入前と比較して吸入中に LF/HF が有意に上昇し，HF nu が有意に下降していることから，吸入中に交感神経が優位になったと考えられる．生理学的にリラックス効果があるといわれているアロマ精油であっても，香りの好みが人それぞれであり，好みによってその効果が異なる可能性がある．香りには多くの人が好む香りもあれば，好き嫌いが分かれるものもある．アロマ精油自体がもつ生理作用と香りの好き嫌いを考慮することで，アロマセラピーの効果を最大限に発揮することができると考えられる．

【結論】アロマセラピーを行う際には、アロマ精油の香りの好き嫌いを考慮することにより、その効果を十分に発揮できると考えられる．

なお，本研究は令和元年度新潟県立看護大学看護研究交流センター地域課題研究助成を受けて実施した．

研究課題名

出生直後から Family Centered Care の介入を受けた超早産児の母親が抱く思い

1. 研究代表者及び所属施設名

代表者氏名：小林　恵子　　長岡赤十字病院

2. 研究分担者氏名

磨田　裕美[1)]，川上　朋子[1)]，山田　捺未[1)]
1)長岡赤十字病院

3. 学内責任者

新潟県立看護大学：西田　絵美

4. 研究助成費執行報告

（円）

予算額	97,600				
執行額	旅費	報償費	役務費	需用費	合計
	14,866	0	58,167	2,150	75,183

5. 研究成果の公表

令和元年・令和２年度地域課題研究発表会
長岡赤十字病院，院内令和３年度研究発表会にて発表予定

出生直後から Family Centered Care の介入を受けた超早産児の母親が抱く思い

○ 磨田裕美[1)]，川上朋子[1)]，小林恵子[1)]，山田捺未[1)]，西田絵美[2)]
1）長岡赤十字病院　2）新潟県立看護大学

○ キーワード：Family Centered Care、超早産児、母親が抱く思い

【目的】

Family Centered Care（以下 FCC）は各施設で推奨され行われている．しかし, 超早産児の母親が FCC の介入を受けた心情を明らかにされている文献は少ない．生命の危機に直面している超早産児と早期に触れ合う母親の思いを明らかにすることで, FCC 推進の一助になると考えた.

【方法】

研究期間内にＡ病院の NICU に入院し，FCC の介入をうけた超早産児の母親 5 名にインタビューガイドを基に半構成的面接を行った．得られたデータを母親がどのような思いを抱いたのかに焦点をあてて分類し，カテゴリー，サブカテゴリーを抽出した．倫理的配慮として，対象に研究目的を文書および口頭で説明し，同意を得た．研究への参加は自由意志であり，不利益を一切被らないこと，データは厳重に取り扱うことを明記し，所属機関の倫理審査委員会の承認を得て実施した.

【結果】

逐語録を分析し 335 個のコード，28 個のサブカテゴリー，5 個のカテゴリーが抽出された.

《　》はカテゴリーを示す.《生きていることへの安心とともに痛々しい姿に切ない思い》《機械に囲まれる我が子へのケアは怖さと自責の念に駆られる》《我が子の変化を感じ母親としての愛情が芽生える》《看護師の存在は安心と自身の成長を実感できる》《カンガルーケアは我が子の存在と母親であることを強く実感する》出産直後は蘇生処置などから，我が子を見るのは一瞬であり，出産の喜びや安堵の感情が先行する.

いざ対面すると, 我が子に触れたい思いを持つ一方で, 心配し守りたい思いから恐怖心を持つ. 経験しなくても良かった苦痛を与えたのではないかと，罪悪感から自責の念の増強につながっていた．その一方で，出生直後から繰り返し我が子に触れることは，恐怖心を徐々に和らげ，我が子の成長を感じ，母親としての愛情が深まり，自責の念を和らげることにもつながっていた．保育器の中からの FCC の介入は，なにもできないよりは良かった．できることは嬉しかった，と語られた．しかし，母親としての満足や実感，児を我が子と実感した気持ちが最高潮に得られたのはカンガルーケアであり，それまでは何もしてあげられてない，と感じていた．そのような中で看護師の存在は，親の危機を知り関わることで，その危機を乗り越える助けになる安心できる存在であった．その一方で自責の念を誰にも伝えることができなかったと語る母親もいた.

【考察】

超早産児は皮膚の未熟性やちいささから，想像の域を超える．新生児看護のなかでも繊細な領域である．FCC が推奨されるなか，母親の気持ちを知らずして勧めていっていいものか戸惑いがあった．初めは様々な思いから，不安や恐怖を抱き，自責の念を持ちながら児に接しているが，我が子へ触れることから相互作用によってネガティブな感情は揺れながらも少しずつ和らぎ，母親としての自覚や喜びに変換されていた.

しかし，カンガルーケア前までは無力感を多くが抱いていた．看護師の存在は安心して一緒に危機を乗り越える存在で有ることがわかった．今よりさらに母と児と一緒の時間を共有し，一緒に歩んでいける存在になれれば，初めてのタッチケアでも恐怖心を抱かせず FCC の推奨につなげられると考える.

【結論】

超早産児の母親は, 児に触れる時, 不安や心配から恐怖心を抱いていた. 回数を重ねると喜びに変換されていったが, カンガルーケア前までは無力感を感じていた.

この研究は令和 2 年度新潟県立看護大学研究交流センター地域課題研究助成を受けて実施した.

研究課題名

化学放射線療法を受けた咽頭癌患者の栄養管理への介入

～入院時から退院後を見据えた関わりを通して～

1. 研究代表者及び所属

代表者氏名：西山まゆみ　　（所属：長岡赤十字病院）

2. 研究分担者氏名・（　所属　）

柴　紗由美，　鳥羽由美子，　（所属：長岡赤十字病院）

3. 学内責任者

新潟県立看護大学：石田　和子

4. 研究助成費執行報告

（円）

予算額	74,000				
執行額	旅費	報償費	役務費	需用費	合計
				58,610	58,610

5. 結果の公表

予定はない

化学放射線療法を受けた咽頭癌患者の栄養管理への介入　　2-2
～入院時から退院後を見据えた関わりを通して～

○柴紗由美[1)]，鳥羽由美子[1)]，西山まゆみ[1)]，石田和子[2)]
1) 長岡赤十字病院　2)新潟県立看護大学

○キーワード：咽頭癌　化学放射線療法　セルフケア　栄養管理

【目的】　退院後も栄養の自己管理が継続できるよう具体的な介入方法を検討する．

【方法】　1. 研究デザイン：質的研究　半構成面接

2. 研究対象者：初回化学放射線療法を行う 50～70 歳代男性の咽頭癌患者で食事のサポートが得られにくい者．研究の趣旨に同意を得られた者．　3. 研究期間　2019 年 4 月～2020 年 2 月

4. データ収集方法・手順

(1)『退院後の食事のヒント』のパンフレット作成 (2) 栄養手帳を使用し食事・体重・検査データ共有

(3) パンフレットを用いて栄養指導　2 回 (4) 栄養評価基準を用いた評価　(5) データ分析

5. 倫理的配慮：当院看護研究倫理審査会の承認を得て実施．対象者に研究目的と主旨，協力の利益と不利益を説明．データは研究の目的以外には用いず，インタビューは録音の同意を得てプライバシーに配慮し実施する事を口頭と文書で説明，同意を得た．

【結果】　1. 対象者　男性 3 名

A 氏：下咽頭癌　肺転移　60 代　胸水による苦痛で食事摂取量減少し経管栄養併用．嚥下時痛 NRS3～4 へ増強し医療用麻薬使用．退院後食欲不振が続き，退院～初回外来時で体重 3.4kg 減少．TP・ALB は上昇したが，プレ ALB 減少と 3 ヶ月の体重減少率が 14.4%と基準値以上の事から今後栄養不良のリスクは高いと予測された．

B 氏：下咽頭癌　70 代　味覚障害・嚥下時痛あり医療用麻薬使用．発熱性好中球減少症・嚥下時痛 NRS8～10 で，12 日間欠食．NRS6～4 で食事再開し安定．口内炎・嚥下時痛と味覚障害は続き，退院～初回外来時で体重 2.3kg 減少．プレ ALB は基準値を下回り，ALB は軽度低栄養で経過したが，初回外来時 ALB・プレ ALB は基準値まで改善．3 ヶ月の体重減少率は 10.4%と基準値以上．今後も栄養不良のリスクが高いと予測された．

C 氏:中咽頭癌　50 代　嚥下時痛 NRS4～5 で医療用麻薬開始．退院後初回外来時，痛みはなく食事量は増え，体重 0.6kg 増加．TP・プレ ALB は基準値以下の事もあったが，退院後初回外来時は基準値まで改善．3 ヶ月の体重減少率も 5.7%と基準値以下，栄養不良リスク該当なし．

2. パンフレットを用いた指導の効果：サブカテゴリー7 個，カテゴリー2 個が抽出された．日常生活の見直しを行った効果として【便秘予防の為の水分摂取の重要性が理解出来た】【栄養手帳は書きやすく継続して使用でき食生活の意識づけに効果的だった】【体重を意識して測定するようになった】【早期からの栄養指導により食事を気にするようになり意識付けに効果的だった】が抽出された．調理の工夫や食事内容の選択は【症状別の対応策を載せた事で食事形態の選択や味付けの工夫をする事ができた】【カラーの写真を入れ視覚的に訴え見やすくした】【食べやすい物であり自炊や外食時の参考になった】が抽出された．以上の結果から新しいパンフレットの作成は有効だった．

【考察】

加來らは「CCRT を施行する咽頭癌患者は，治療開始前から低栄養リスクを高率に有し治療期間中に栄養指標はさらに低下する」と述べており，早期からの栄養指導が重要だと示唆している．そこで，1 回目は入院早期に行い「今後の経過や症状出現時の対応を知れてよかった」と聞かれ，入院生活のイメージが図れた．2 回目は退院前に行い，食生活の見直しにつながった．指導時期は適切だったと考える．退院後は「書く事でこれが食べやすかったと参考になった」と話し，食生活の見直しが出来た．退院後も副作用により食生活に苦労していたが，「パンフレットは役立った」「気になる時見た」「カロリーの高い方を手にした」と聞かれ，経口摂取を増やす努力がみられた．体重測定も継続でき，意識化が図れた．3 人共体重減少は約 3kg 以内に抑えられ，TP・ALB も上昇、栄養状態は改善傾向にあった．

入院早期からの栄養指導は，食生活の見直し・セルフケア能力の向上につながり，有効な介入方法だったと考える．

【今回の研究の限界】パンフレットと栄養手帳について修正点の指摘はなかったが，症例数が増えれば修正点が出てくる可能性はある．その際は内容を検討する．

【結論】

1. パンフレットを使用した栄養指導は，化学放射線療法を受けた咽頭癌患者の退院後の低栄養状態が回避され，栄養管理に有効であった．2. 栄養手帳の使用は食生活の見直し・セルフケア能力の向上につながり，退院後も継続して栄養管理を行う事ができた．

なお，本研究は令和元年度新潟県立看護大学看護研究交流センター地域課題研究助成を受けて実施した．

研究課題名

新人看護師における夜勤に対する不安

1．研究代表者及び所属

代表者氏名：霜垣美由紀　　（所属：北里大学保健衛生専門学院）

2．研究分担者氏名・（所属）

なし

3．学内責任者

新潟県立看護大学　　氏名：酒井　禎子

4．研究助成費執行報告

（円）

予算額	96,000				
執行額	旅費	報償費	役務費	需用費	合計
	2,442	0	11,513	0	13,955

5．研究成果の発表

北里大学保健衛生専門学院で行われる研究発表会

新人看護職員における夜勤に対する不安

○ 霜垣美由紀[1)]，酒井禎子[2)]

1) 北里大学保健衛生専門学院　2) 新潟県立看護大学

○ キーワード：夜勤，シミュレーション研修，新人看護職員，不安

【目的】　新人看護職員が夜勤前に感じている不安を明らかにする.

【方法】

A 病院新人看護職員 19 名を対象に半構造的なインタビューガイドを用いたグループインタビューを行った. 夜勤導入後 1 か月を経過した頃に自身の体験を振り返り, 夜勤前の気持ちや不安だったことを聴取した. 録音データから逐語録を作成し, 夜勤に対する不安を示す語りを抽出, カテゴリー化した.

【倫理的配慮】

A 病院の看護部倫理審査の承認を得て実施した. 研究の目的・方法, プライバシーの保護, 断っても不利益が無い事, データは匿名扱いとし, 個人が特定されないよう配慮するとともに, 音声・電子データは情報漏洩がないよう厳重の管理を行うこと, データは研究以外に用いない事を説明し同意を得たうえで実施した.

【結果】

参加者は 17 名であり, 夜勤経験がない者が 3 名含まれていた. 新人看護職員の夜勤に対する不安は 5 つのカテゴリーに分類された. ＜体調が不安定になる＞は, 緊張による体調の変化や夜勤をすることで生活リズムが崩れ体調が乱れることへの不安を示すものであった. ＜求められる業務が多い＞は夜勤スタッフが少なく, 看る患者が多い事による多重課題や, 時間内に業務を終わらせること, 自分の判断で行動することに感じる責任の重さを含んでいた. ＜未経験のケアや業務への不安＞は夜勤の流れのイメージや雰囲気がつかめないことや, 終末期患者の対応等未経験な業務への不安であった. ＜急変時の対応・報告が難しい＞は急変時の動き方やその報告・相談, あるいは予測しない出来事への不安であった. ＜ペアになる先輩看護師に気兼ねや緊張を感じる＞は, まだ実践出来ない技術があるため, 先輩へ依頼することに気兼ねがあることや, 業務上ペアを組む先輩に感じる緊張感を示していた.

【考察】

夜勤による体調変化への不安は夜勤の特徴とも言える. A 病院の勤務体制は 2 交代制であり, 慣れない中で長時間にわたる勤務や初めて夜勤帯に仕事を行う緊張から体調が不安定になると考えられる. 日勤帯とは異なり, 限られた人数の中で予測されない多重課題も多く, 患者把握に関しては十分ではない中で, 多重課題から優先順位を考える力はまだ不十分である新人看護師にとって, 自己の判断に対する責任の重さから不安に繋がると考える. また夜勤帯における先輩看護師との関係性の構築が不安に関連しており, 先輩看護師が新人看護職員個々の特性や緊張状態を感じ取り, レディネスを理解しながら育成する必要性がある. そこで, 新人看護職員が先輩看護師に気兼ねなく相談できる環境づくりが必要であると考える. また病棟全体の指導体制として, 夜勤帯を想定した様々な看護場面から患者のアセスメントやそのアセスメントから看護実践行動に至る思考過程においてモデルを示すことが重要と考える.

【結論】

夜勤で遭遇する看護場面や起こりうる急変場面のイメージ化を図り, その場面における自身の役割と対応を考え, 安全・優先順位・夜間の観察をテーマとしたシミュレーション研修が, 新人看護師の不安の軽減に効果的である可能性が示唆された.

利益相反：令和元年度新潟県立看護研究交流センター地域課題研究助成を受けて実施した.

研究課題名

精神科中心の公的病院に勤務する多職種の暴力対応知識の現状把握―「患者からの暴力に対する対応知識チェックリスト」を用いて―

１．研究代表者及び所属施設名

代表者氏名 ： 渡辺　沙織（所属：独立行政法人国立病院機構さいがた医療センター）

２．研究分担者氏名

椿　竜雅[1)]，　中村　幸恵[1)]

1）独立行政法人国立病院機構さいがた医療センター

３．学内責任者

新潟県立看護大学 ： 永吉　雅人

４．研究助成費執行報告

（円）

予算額	93,000				
執行額	旅費	報償費	役務費	需用費	合計
	3,476	0	22,317	9,713	35,506

５．研究成果の公表

本研究は, 日本こころの安全とケア学会が開催した「2019 年第 2 回学術集会」にて研究発表を行い, また日本こころの安全とケア学会の学会誌への投稿を行った.

精神科中心の公的病院に勤務する多職種の暴力対応知識の現状把握
―「患者からの暴力に対する対応知識チェックリスト」を用いて―

○椿　竜雅[1)]，中村幸恵[1)]，渡辺沙織[1)]，永吉雅人[2)]
1）独立行政法人国立病院機構さいがた医療センター　　2）新潟県立看護大学
○ キーワード：　CVPPP, 暴力対応知識，教育

【目的】

A 病院において, 患者に関わる様々な職種が暴力場面を経験しているが, 十分な教育が実施されておらず, 不安を感じている職員は多い. 教育に費やせる時間は限られているため, いかに効率的に教育を行うかが課題となっている. 先行研究により作成された「患者からの暴力に対する対応知識チェックリスト」を用いて, 当院に勤務する全職員の暴力対応知識に関する実態を把握し, 今後の暴力に関する教育の一助とする.

【方法】

先行研究の質問項目（「適切な対応に関する知識」:12 項目, 「患者理解の方法」:7 項目, 「患者の言動からの予測や判断」:6 項目）に, 対象者の属性を加えた調査票を作成し, 当院全職員 300 名に対し自記式質問紙調査を行った. 得られたデータをエクセルで単純集計し, 属性別による比較（職種, 研修受講の有無等）を行った. さらに, 平均正解率の下位尺度の比較においてはフリードマンの検定（3 群以上の対応のあるノンパラメトリック検定）を, 所属別および研修別の平均正解率の比較においてはクラスカル・ウォルス検定（3 群以上の対応のないノンパラメトリック検定）を, 夜勤の有無別平均正解率の比較においてはマン・ホイットニーの U 検定（2 群の対応のないノンパラメトリック検定）を用いた. さらに多重比較にはボンフェローニの補正を行った. ここで, 統計計算および検定は Microsoft Excel 2019 を使用し, 検定における有意水準は 5%とした.

【倫理的配慮】

得られたデータは研究以外に使用せず, 不利益が生じないこと, 匿名性が保たれるよう配慮した. 研究対象者に対し研究の趣旨を説明し, 研究代表者の所属施設の倫理審査委員会の承認を得た. この取り組みに関する利益相反はない.

【結果】

回収率は 88.0%であった. A 病院全体の平均正解率は, 全範囲が 83.2%であった. 下位尺度別に見ると, 「適切な対応に関する知識」は 84.7%, 「患者の言動からの予測や判断」が 82.8%, 「患者理解の方法」は 81.1%であり, 検定の結果有意差は認められなかった.

職種別の比較では, 平均正解率が高い順に心理療法士, 看護師・准看護師, 臨床検査技師・臨床工学技士が 93.0%,88.1%,85.7%, 低い順に保育士・児童指導員, 医師, 療養介助専門員・療養介助員が 6.0%,68.8%,69.2%であった. 研修受講の有無における平均正解率は, インストラクター・トレーナー養成研修, CVPPP 院内研修, 未受講の順で 90.7%,90.4%,79.2%であり, 検定の結果, 受講と未受講とでは有意差が認められたものの, 二つの研修においては有意差が認められなかった. 夜勤の有無による比較では, 夜勤をしている者の方が, 全ての下位尺度において平均正解率が高い結果となり, 検定の結果, 有意差が認められた.

【考察】

本研究において, CVPPP 院内研修受講者の平均正解率は, インストラクター・トレーナー養成研修の平均正解率と同等であり, CVPPP 院内研修の効果が確かめられた. また, 今後, より効率的に院内教育を行うために, 平均正解率の低かった職種である保育士・児童指導員, 医師, 療養介助専門員・療養介助員や, 看護師の中でも夜勤をしていない看護師を対象とした教育について検討する必要性が示唆された.

なお，本研究は令和元年度新潟県立看護大学看護研究交流センター地域課題研究助成を受けて実施した.

研究課題名

新人看護師対象「急変対応シミュレーション」研修受講後の成果

1．　研究代表者及び所属

代表者名　：　本田　康裕　　所属　：　魚沼基幹病院・救命救急センター

2．　研究分担者氏名（所属）

今井　直美（魚沼基幹病院・救命救急センター）

南雲　良美（魚沼基幹病院・救命救急センター）

宮内　史香（魚沼基幹病院・救命救急センター）

3．　学内責任者

新潟県立看護大学　：　酒井　禎子

4．　研究助成費執行報告

（円）

予算額	100,000				
執行額	旅費	報償費	役務費	需用費	合計
	60,000	0	23,454	0	83,454

5．　研究成果の公表

全国自治体病院学会にて発表予定.

新人看護師対象「急変対応シミュレーション」研修受講後の成果

○ 今井直美[1)]，南雲良美[1)]，本田康裕[1)]，宮内史香[1)]，酒井禎子[2)]
1) 魚沼基幹病院・救命救急センター　2) 新潟県立看護大学

○ キーワード ： 新人看護師，新人教育，急変対応，シミュレーション学習

【目的】

近年，医療技術の高度化，医療安全への要求の高まりなどに伴い，医療現場が看護師に求める臨床実践能力は高まっている．救命救急センター部門では患者重症度および緊急度が高く，臨床では正確かつ迅速な実践が求められ，新人に求められる実践レベルは高い．一方，「シミュレーションをとりいれた教育は，患者の身体侵襲を伴うことなく看護知識・技術の習得ができ，医療安全の確保がなされつつも看護の質向上の効果を挙げている」[1)] と言われている．急変対応をテーマとしたシミュレーション学習は，看護の質向上において一定の成果を挙げることが期待されることから，本研究において「急変対応シミュレーション」が新人看護師へもたらした成果について探索的に明らかにすることとした．

【方法】

平成 28～30 年度に急変対応シミュレーションを受講した新人看護師 5 名に対し，半構造的面接法を行い，逐語録を作成した．逐語録から研修に対する成果を表すと思われる文脈を抽出しコード化を行い，類似性・相違性に基づいて分析し，サブカテゴリー・カテゴリー化を行った．倫理的配慮として，研究参加は自由意思であること，回答した内容により業務上不利益を被ることはないこと，話したくないことは話さなくてよいことを説明した．なお，研究に先立ち調査施設の看護部倫理委員会より承認を得た．

【結果】

分析の結果，「漠然とした恐怖がなくなった」，「自分では何もできないというイメージが払拭された」，「チームで動くことが理解できた」，「急変時のイメージができるようになった」，「視野が広がった」，「役割分担やコミュニケーションへの意識が高まった」，「動けるという自信につながった」，「実際の業務に活かせる知識・技術が習得できた」，「実際の急変の場で，研修で学んだことを応用できた」，「声が出せるようになった」，「状況をアセスメントしようとする思考が身に付いた」，「シミュレーションはイメージが付きやすかった」，「知識をふまえて技術を習得する学習プロセスで学びが深まった」，「回数を重ねることでできるようになった」，「その場で質問しながら疑問を解決できた」という 15 個のサブカテゴリーが明らかになり，『急変に対する負のイメージが軽減した』，『急変対応時のイメージ化が高まった』，『実際の現場で動けるようになった』，『シミュレーション学習の手法により実践に繋がる学びができた』という 4 個のカテゴリーに分類された．

【考察】

新人看護師に対する急変対応シミュレーションは，シミュレーション学習という手法により，実際の症例を模した状況・環境下に行うことで急変対応場面のイメージ化を高めつつ，知識確認の上で技術訓練を行う手法，複数回の反復訓練，学習過程で生じた疑問の都度解決という利点を含め，実践に繋がる学びができた実感に繋がったと考えられる．また，急変対応時のイメージ化が高まったことが，現場で動けるという自信に繋がり，急変に対する負のイメージを軽減すると共に，実際の急変現場で一歩を踏み出し行動に移すことができ，研修の学びを現場で応用できたという実感に繋がったと考えられる．以上が急変対応シミュレーションにより新人看護師における急変対応時の看護の質向上に役立った成果であると考えられた．

【結論】

新人看護師を対象とした「急変対応シミュレーション」は，急変に対する負のイメージを軽減すること，急変対応時のイメージ化を高めること，実際の現場で行動に移すことができたことに繋がっていた．

またシミュレーション学習という手法が，実践に繋がる学びを得ることに役立っていた．

引用文献

1）小堂弘子：看護領域におけるシミュレーションの活用．東洋医会詩，57(2)，160-162，2010.

利益相反

令和元年度新潟県立看護大学看護研究交流センター地域課題研究助成を受けて実施した．

2020年度地域課題研究

７．　松井ルミ子：新潟県立中央病院

８．　田巻　康弘：介護老人保健施設ケアホーム三条

９．　南雲　敬子：長岡赤十字病院

10.　木村　恵美：長岡赤十字病院

11.　涌井　幸恵：新潟県立中央病院

研究課題

「開心術後の患者に対する早期リハビリテーションの効果」

1. 研究代表者及び所属

代表者氏名：松井ルミ子　　(所属：新潟県立中央病院)

2. 研究分担者氏名

・大崎友耶（所属：新潟県立中央病院）
・小竹　雄（所属：同上）
・片桐亜弓（所属：同上）
・木賀　洋（所属：新潟県立柿崎病院）
・小林遼平（所属：新潟大学医歯学総合病院）
・名村　理（所属：新潟県立中央病院）
・古川美冴（所属：同上）
・三村慎也（所属：同上）

3. 学内責任者

新潟県立看護大学：岡村典子

4.研究助成費執行報告　　(円)

予算額	100,000				
執行額	旅費	報償費	役務費	需要費	合計
	0	0	0	41,156	41,156

5. 研究成果の公表

令和４年３月に開催される日本集中治療医学会学術集会にて演題発表を行う予定である。

開心術後の患者に対する早期リハビリテーションの効果

○大﨑友耶[1)]，小竹雄[1)]，片桐亜弓[1)]，木賀洋[4)]，小林遼平[3)]，名村理[2)]，古川美冴[1)]，
松井ルミ子[1)]，三村慎也[2)]，岡村典子[5)]
1）新潟県立中央病院　看護部　　2）新潟県立中央病院　心臓血管外科
3）新潟大学医歯学総合病院　心臓血管外科　　4）新潟県立柿崎病院　リハビリテーション科
5）新潟県立看護大学
○ キーワード：開心術，心臓リハビリテーションプログラム，早期リハビリテーション，　チーム医療

【背景と目的】心臓血管外科の開心術後リハビリテーション（以下心リハとする）の有用性として，術後早期に歩行獲得ができる，ICU 領域におけるせん妄を予防できる，運動耐容能を改善できる，QOL を改善できる等があげられている．しかし開心術は，術中の人工心肺の使用や水分バランスの不均衡により術後の血行動態が不安定であることが多い．また多数のラインやチューブが存在し，患者側・医療者側のどちらにとっても離床は容易ではなく，リハビリは困難な状況にある．A 病院においても ICU から使用可能な心リハプログラムがなく，早期離床は実施されていなかった．そこで，2019 年度に医師や理学療法士と協働し心リハプログラムを作成し導入した．医師の指示のもと，患者が ICU 在室中から，理学療法士と看護師で転倒・転落やライン・チューブ類の計画外抜去のリスクを分散し，早期離床を実施した．また呼吸・循環が安定した状態で離床できるよう，開始基準や中止基準を設定した．

本研究は ICU から心リハを実施することは，早期の歩行獲得とせん妄の予防を可能にするのではないかという仮説のもと，心リハを病棟から開始した群（対照群）と ICU から開始した群（介入群）を比較検討し，このプログラムの効果を明らかにすることを目的として実施した．

【方法】研究デザインは仮説検証型研究デザイン，対象者は待機的開心術を受けた患者とした．調査項目は基本情報，術後経過について診療録より後方視的に調査した．データの収集期間は，対照群は 2018 年 10 月～2019 年 9 月，介入群は 2020 年 1 月～9 月である．統計ソフト SPSS を用いて対照群と介入群の比較検討を行い，統計学的有意水準は p 値＜0.05 とした．本研究は研究代表者の所属する倫理委員会にて承諾を受けている．また令和 2 年度新潟県立看護大学看護研究交流センター地域課題研究助成を受けて実施した．

【結果と考察】病棟から心リハを開始した対照群は 19 名，ICU から心リハを開始した介入群は 21 名であった．群間比較では基本情報である年齢，性別，BMI，手術時間，人工呼吸期間に有意差はなかった．術後経過では術後立位，歩行までの日数および ICU 在室中のせん妄陽性率に有意差はなかった．平均人工呼吸期間は対照群では 2 日，介入群では 2.5 日となっており，有意差は認めないものの，介入群の方が長い傾向にあった．心リハプログラムの開始基準には人工呼吸器からの離脱が含まれているため，術後立位，歩行までの日数に有意差が生じなかった可能性があると考えられる．せん妄陽性率は対照群が 15.7%，介入群が 23.8%であった．堀ら（2021）は離床開始日の遅れが開心術後せん妄の独立した発生因子と述べていることから，本研究においても介入群のせん妄陽性率の低下につながらなかったと考える．また本研究は単施設であり 40 症例と少ないため，この研究結果は開心術を受ける全ての患者に一般化するのは困難であると考える．

【結論】本研究では早期の歩行獲得やせん妄の予防といった効果は得られなかった．

【文献】堀幸雄，松瀬博夫，志波直人：集中治療室へ入院中の開心術後患者のせん妄症状の実態と発生要因の分析．久留米医会誌　84：48-55，2021.

研究課題名

手洗い研修により介護職員の手洗いが習慣化するかの検証
～A 介護老人保健施設における感染予防への取り組み～

１．研究代表者及び所属

代表者名：田巻　康弘　　（所属：介護老人保健施設ケアホーム三条）

２．研究分担者氏名（所属）

長野　康博　（介護老人保健施設ケアホーム三条）
早川　陽子　（済生会三条病院）

３．学内責任者

新潟県立看護大学：永吉　雅人

４．研究助成金執行報告

（円）

予算額	100,000				
執行額	旅費	報償費	役務費	需用費	合計
	7,720	0	0	34,240	41,960

５．研究成果の公表

手洗い研修による効果は見られず習慣化を図るためには，口頭での伝達では効果が乏しいと思われる．今後は，工夫した研修が必要である．

なお，今研究は「第 34 回　日本老年泌尿器科学会」で発表を行なった．

手洗い研修により介護職員の手洗いが習慣化するかの検証
～A 介護老人保健施設における感染予防への取り組み～

○ 田巻康弘[1)]，長野康博[1)]，早川陽子[1)]，永吉雅人[2)]
1) 介護老人保健施設ケアホーム三条　2) 新潟県立看護大学

○ キーワード：老健施設，手洗い，習慣化

【目的】介護老人保健施設(以下、老健とする)での介護ケアの中で，入所者の尿路感染症を疑われる発熱に多く接している．老健介護職員は，日々コミュニケーションの取りにくい認知症者や超高齢者への介護ケアを行っている．そこに加え，発熱による食事量低下や，頻尿・残尿感出現への対応に困難を感じており，感染予防を行う事で発熱者を軽減できないかと考えた．

本研究では，A 老健介護職員を対象として手洗い回数のアンケート調査と液体石鹸の使用状況を比較し，手洗い研修で手洗いが習慣化するのかを検証することを目的とする．

【方法】A 老健介護職員に対し研究メンバーが個別に，研究メンバーで作成した用紙を使用し，手洗いに関する口頭での指導と，ブラックライトを使用した演習を行った．その上で，①研修前(R2 年 8 月)，②研修 1 週間後(同年 8 月)，③研修 1 ヶ月後(同年 9 月)，④研修 3 ヶ月(同年 11 月)，⑤6 ヶ月後(R3 年 3 月)の合計 5 回，手洗いで使用する液体石鹸の一日の液体石鹸使用量調査と，独自で作成したアンケート調査(手洗い回数など)を行った．

・倫理的配慮：アンケート用紙は無記名とし，個人が特定出来ないように配慮した．記入内容により不利益が生じないこと，調査への参加不参加は自由意思である事を口頭と文章で説明し，アンケートに回答することで同意を得たこととした．また，今研究は研究代表者所属施設の倫理審査を受けている．

【結果】「石鹸使用量合計」は，①1905g②1881g③1702g④1824g⑤2067g だった．アンケート調査による「手洗い回数」の最頻値は，③が 35 回⑤が 25 回であり，それ以外は 30 回だった．①と②を経験年数 11 年未満と 11 年以上で分けた場合，11 年未満の②の最頻値のみ 25 回だったが，それ以外の最頻値は 30 回だった．「手洗い時間」の最頻値は，①～⑤まで全て 20 秒だった．①と②を経験年数 11 年未満と 11 年以上で分けた場合，11 年未満の②は 15 秒だったが，それ以外の最頻値は 20 秒だった．「感染予防に手洗いは有効だと思うか」では，ほとんどが“とても有効”と答えた．「感染予防は大切と思うか」は，ほとんどが“とても大切”と答えた．「手洗い回数」「手洗い時間」「感染に対する意識」について検定を行なったが，全てにおいて有意差はみられなかった．

【考察】石鹸使用量は①に比べ，②さらに③が少なくなった．しかし④⑤と石鹸使用量は増加した．石鹸使用量の増減は，季節などの影響により変化したと考えられる．また，石鹸使用量調査の④⑤で増加しているのは，新型コロナウイルス感染状況も関連している可能性がある．①より②の方が石鹸使用量が少なかったため，研修による石鹸使用量の増加は見られなかったと考えられる．経験年数 11 年未満と 11 年以上で分けると，研修の効果が異なることが分かった．感染予防に手洗いは有効だと認識し，さらに感染予防は大切だと考えている結果に反し，手洗いが行われていない実態がわかった．手洗い「回数」や「時間」などで検定を行ったが，全て有意差は認められず習慣化以前に「研修の効果があった」とは認められない．

【結論】今回，手洗い研修による効果は見られなかった．習慣化を図るためには，口頭での伝達では効果が乏しいと思われる．今後は，動画使用や密にならないような集合研修など，工夫が必要である．

・利益相反：令和 2 年度新潟県立看護大学看護研究交流センター地域課題研究助成を受けて実施した．

研究課題名

A 地域の救急医療輪番病院で急性期医療に携わる看護師の
ACP の認知の程度に関する実態調査

1. 研究代表者及び所属

代表者氏名：南雲敬子　　所属：長岡赤十字病院

2. 研究分担者氏名

池田幸子，近藤久美子，村越　朋，目黒信子　　所属：長岡赤十字病院

3. 学内責任者

新潟県立看護大学：前川絵里子

4. 研究助成費執行報告

（円）

予算額	95,000				
執行額	旅費	報償費	役務費	需用費	合計
	0	0	23,740	52,588	76,328

5. 研究成果の公表

予定なし

A 地域の救急医療輪番病院で急性期医療に携わる看護師の ACP の認知の程度に関する実態調査

○池田幸子[1)]，近藤久美子[1)]，南雲敬子[1)]，目黒信子[1)]，村越　朋[1)]，前川絵里子[2)]，井上智代[3)]
1）長岡赤十字病院　2)新潟県立看護大学　3)前新潟県立看護大学

○キーワード：ACP（advance care planning），救急における終末期，人生の最終段階，意思決定

【目的】

2018 年厚生労働省は Advance Care Planning(以下 ACP とする)の愛称を「人生会議」とし，現在では一般市民の間でも広まりつつある．救急における終末期の患者に対しても ACP を意識して関わる事ができれば，切迫した意思決定場面においても患者本人および家族の意思を尊重した治療や看護の一助になると考える．しかし，現時点では急性期医療に携わる看護師の ACP の知識に基づいた看護の実践についての先行研究は稀少であり，ACP の認知の程度についても十分明らかとなっていない．そこで A 地域の救急医療輪番病院で急性期医療に携わる看護師を対象に ACP の認知の程度に関する実態を明らかにすることを目的とする．

【方法】

対象者は A 地域の救急医療輪番病院で救急搬送や緊急入院に関わる部署の看護師 200 名（A 病院 100 名，B 病院 50 名，C 病院 50 名）とした．2021 年 6～7 月，各病院看護部長に調査依頼文と自記式質問用紙，返信用封筒を郵送し，配布を依頼，郵送にて回収した．調査内容は「人生の最終段階における医療に関する意識調査」（2018 年．以下，全国調査）に準じ，属性，ACP の認知について，救急における終末期の医療について，対象者自身の医療や療養に関することについて尋ねた．分析は基本統計に全国調査を併記した．SPSS Ver.28 を用いた．倫理的配慮として調査は無記名で行い，研究協力は自由意思で協力有無により不利益はないこと等を書面説明し同意欄記載により同意を得た．所属病院の倫理審査委員会の承認を得た．

【結果】

分析対象者は 116 人（有効回答率 58.0%），年代は 20～50 歳代であった．取得免許は看護師 115 人，他准看護師 1 人, 保健師 5 人. 現在部署の勤務年数は平均 6.37 年. ACP の認知の程度は, よく知っている（14.7%, 全国 19.7%），聞いたことがあるがよく知らない（31.0%, 全国 36.6%），知らない（54.3%, 全国 42.5%）であった．また ACP の賛成は(88.8%, 全国 76.7%)であった．ACP の認知の程度で“よく知っている”の回答者は，所属部署で ACP の言葉は認知されていると思う（$P<0.01$），所属部署で ACP の意味は認知されていると思う($P<0.05$)，意思決定支援に関する研修を受けたことがある($P<0.01$)，人生の最終段階の意思決定支援の対応に自信がまあまあある（あるは回答無）（$P<0.05$），対象者自身が家族と医療介護関係者と医療・療養について話し合うきっかけは学習会（$P<0.05$）が有意に高かった．

【考察】

ACP の認知の程度では ACP を“知らない”と回答した者が A 地域では多く，所属部署での ACP の言葉の認知，意味の認知が十分ではないことの関連が考えられた．また ACP を“よく知っている”者は人生の最終段階の意思決定支援の対応にも自信がある傾向と考えられることから，救急における終末期の意思決定支援の推進には，ACP の認知を所属全体で進める必要が示唆された．

【結論】

ACP の認知を所属全体で進めることで，救急における終末期の意思決定支援の推進につながることが期待できる．

なお，令和 2 年度新潟県立看護大学看護交流センター地域課題研究助成を受けた．

研究課題名

A 病院救急外来受診患者への救急外来看護師による帰宅時支援の実際

1．　研究代表者及び所属

代表者氏名：木村恵美　　所属：長岡赤十字病院

2．　研究分担者氏名・(所属)

早川由紀美，保科愛実，堀克也，牧和久　（所属：長岡赤十字病院　）

3．　学内責任者

新潟県立看護大学：東條紀子

4．　研究助成費執行報告

（円）

予算額	100,000				
執行額	旅費	報償費	役務費	需用費	合計
	8,272	0	840	89,880	98,992

5．　研究成果の公表

研究成果の公表は第 23 回日本救急看護学会学術集会および長岡赤十字病院院内看護研究発表会にて発表する予定である.

A 病院救急外来受診患者への救急外来看護師による帰宅時支援の実際

○ 木村恵美 1)，早川由紀美 1)，保科愛実 1)，堀克也 1)，牧和久 1)，東條紀子 2)
1）長岡赤十字病院　2）新潟県立看護大学

○ キーワード：帰宅時支援，救急外来，救急外来看護師

【目的】救急外来では，来院方法を問わず搬送患者の約 8 割は受診後に帰宅している現状がある（厚生労働省 2015）．しかしながら医学的には救急外来から帰宅できる状態であっても，患者個々の様々な状況に応じる必要があり，帰宅時の支援は救急外来看護師の個々の力量に任されている.本研究は救急外来受診患者への救急外来看護師による帰宅時支援の実際を明らかにする.

【方法】調査対象：A 病院救急外来勤務の同意を得た看護師，研究デザイン：質的帰納的方法，調査期間：2020 年 4 月から 2021 年 2 月，調査内容：自記式質問紙調査及び半構成面接調査を 1 人 30 分程度行った．自記式質問紙により研究対象者に看護師の経験診療科，帰宅時支援に対して悩んだ事例，支援内容をあらかじめ記述してもらった．さらにインタビューにより帰宅時支援の実際を詳細に話してもらった．分析は，事例の概要・状況等を整理し，インタビューは逐語録に起こし，帰宅時支援の内容に関する部分を抜き出して研究者間で類似性と相違性に基づいてカテゴリー分類を行った.

【倫理的配慮】調査対象者へ研究目的，自由意思による調査への参加や拒否，匿名とすること等を文書と口頭で説明し，同意を得た．各データの匿名性および機密性保持を遵守した．研究実施者の所属施設の病院倫理審査及び看護部倫理委員会の承認を得た.

【結果】救急外来看護師 15 名よりデータを得られた．帰宅時支援に悩んだ事例は，34 事例で内訳として高齢患者が 23 事例，うち 17 事例は後期高齢患者であった．患者の主疾患は内因性疾患 8，骨折 7，頭部外傷 5，精神疾患 4，等であり，患者の急激な ADL の低下と介護の対応に労力を費やす事例がみられた．インタビューの分析からは，198 コード，53 サブカテゴリー，16 カテゴリーが抽出された．カテゴリーは《　》で示す．抽出されたカテゴリーは《診療補助に有効な情報をカルテや社会背景から収集》《病態を予測し患者の状況を医師に説明》《今後起こりうることを予測し帰宅の可否を評価》《帰宅可能となった患者・家族へのインフォームドコンセント》《患者の症状に応じた帰宅方法を提案》《帰宅に向けて問題が解決されるよう調整》《帰宅に向けて関連機関と連携》《帰宅後に出現が予測される症状の対処方法を説明》《対象に適切と思われる媒体での説明》《自宅での医療処置・医療管理方法の説明》《実際の活動状況や処置内容を家族に見せながら説明》《自宅療養のためにキーパーソンとなり得る人を見つけ協力を依頼》《家族へ自宅療養を可能にする方法や社会資源を説明》《症状増悪時の受診継続の必要性を説明》《帰宅時および帰宅後の安否確認》《継続した医療・看護が提供できるようスタッフ間や他部門と協力》であった.

【考察】救急外来看護師は帰宅後を見据えた患者および介護力等の社会的背景をふまえたアセスメント能力を有し，社会資源の知識をもとに速やかに他機関・多職種と協働できるシステムを構築する必要性が示唆された.

【結論】救急外来看護師は，限られた時間の中でアセスメントし，次の受診までの療養に対する患者家族の生活を予測して支援を行っていた．さらに社会資源を活用して他機関・多職種へつなげて帰宅時支援をしていることが明らかになった.

本調査は，令和２年度新潟県立看護大学看護研究交流センター地域課題研究助成を受けた.

研究課題名

3 次救急医療施設における一般病棟での急変事例の現状分析
－早期警告スコア（National Early Warning Score）を用いた後方視的調査から－

１．　研究代表者及び所属

代表者氏名：涌井　幸恵　（所属：新潟県立中央病院）

２．　研究分担者

笹川　亜依（新潟県立中央病院）
平山　理恵（新潟県立中央病院）
相澤　達也（新潟県立看護大学）

３．　学内責任者

新潟県立看護大学：髙柳　智子

４．　研究助成費執行報告

（円）

予算額	30,000				
執行額	旅費	報償費	役務費	需用費	合計
	0	0	0	13,641	13,641

５．研究成果の公表予定

第 24 回日本救急看護学会学術集会にて発表を計画している.

3 次救急医療施設における一般病棟での急変事例の現状分析
―早期警告スコア（National Early Warning Score）を用いた後方視的調査から―

○笹川亜依[1)]，平山理恵[1)]，涌井幸恵[1)]，高柳智子[2)]，相澤達也[2)]

1）新潟県立中央病院　2)新潟県立看護大学

○ キーワード　National Early Warning Score(NEWS)，院内急変，院内救急対応システム

【目的】

近年，多くの医療施設で患者の状態の悪化を発見し，早期介入する目的で院内救急対応システム（Rapid Response System：以下 RRS）が採用され，客観的に急変を予測する指標として早期警告スコア（National Early Warning Score；以下 NEWS）が使用されている.

本研究は，RRS を未導入で，患者の急変を予測するための院内の基準を設けていない 3 次救急医療施設にて，一般病棟から予定外で ICU 入室となった急変事例の入室前の NEWS を遡及的に分析した．これにより NEWS ならびに RRS の導入を検討するうえでの基礎資料を得ることを目的とした.

【方法】

対象：A 病院にて過去 3 年間で一般病棟から予定外で ICU 入室となった事例．なお，NEWS の対象外である 15 歳未満の小児と，NEWS の感度が低いことが指摘されている COPD の診断を受けている者は除外した.

データ収集方法：電子カルテ内の経過表から，看護師が対象の状態悪化に気づき医師に報告した時刻(以下，報告時刻)の記録を確認し，①対象の属性(年齢，性別，診療科）②報告時刻直近の NEWS 各項目データ(呼吸数，SpO_2，酸素投与，体温，収縮期血圧，心拍数，意識状態）③報告時刻から 8 時間前までの間の NEWS 各項目データについて，収集した.

分析方法：各時点の NEWS を欠損データの有無にかかわらず算出し，医師の迅速な診察や RRS 起動が考慮される NEWS 中等度リスク以上となった時刻を確認した. 次に，報告時刻と NEWS が中等度リスク以上となった時刻が一致した群(以下，一致群)と一致しなかった群(以下，不一致群)に分け比較した.

倫理的配慮：研究協力施設の倫理委員会の承認を得て実施した.

【結果】

収集した 131 事例のうち，準緊急手術後など予定外入室に該当しない事例および報告時刻から遡りすべての時点で NEWS 中等度リスク未満，あるいはデータ自体がなかった事例を除いた 88 事例を分析対象とした. NEWS 項目のデータがすべて揃っていたのは 8 事例のみで，最多は呼吸数の欠損(71 事例)であった. 一致群は 36 事例(報告時刻で中等度リスク 22 事例，高度リスク 14 事例)，不一致群は 52 事例(報告時刻で低リスク 6 事例，中等度リスク 18 事例，高度リスク 28 事例)であった. 不一致群の中等度リスク以上となった時点から報告時刻までの時間差は 11 分～526 分であり，低リスク 6 事例は全員 2 項目の欠損があり，報告時刻の 94～314 分前に中等度リスクに至った後に低リスクとなっていた. また，NEWS スコア項目の欠損の有無別で上記の時間差を比較したところ，欠損あり 0～526 分，欠損なし 0～480 分であった.

【考察】

Schein ら（1990）は，心停止前 8 時間以内に 53%に呼吸器系の異常，42%に意識レベルの異常があり，急変には予兆があると述べており，NEWS は急変の予兆を早期に認識することができるツールとして活用が期待されている. 本研究において，不一致群には報告時に既に高リスクである事例や中等度リスク以上になってから医師への報告まで 1 時間以上経過した事例が多く見受けられ，より早い段階での対応が求められる. 本研究の限界として，NEWS を看護師に周知しない状況での調査であり，NEWS の項目を全て測定している事例は極めて少なく，実際よりも低スコアになったことは否めない. 中でも，呼吸数を測定していない事例が最多であった. 呼吸数は全身状態悪化の最も早いサインと言われる一方で，一般病棟では測定されないケースが多いことが指摘されている（安宅，2016）. 本研究においても同様の課題が明らかとなり，呼吸数を測定する必要性の啓蒙や呼吸数測定をできるシステム作りは急務である. 加えて，NEWS 項目が全て揃っていても，中等度リスク以上となった時点から報告時刻まで時間経過が長い事例もあったことから，NEWS を理解し活用することで，急変前の予兆に気づき早期の対応へと繋げられると考える.

【結論】

報告時刻と NEWS 中等度リスク以上となった時刻が一致していない事例が多く，呼吸数測定をはじめ，急変の予兆を的確に把握し早期対応できるための取組みの必要性が示唆された.

利益相反：本研究は，令和 2 年度新潟県立看護大学看護研究交流センター地域課題研究の助成を受けて実施した.

令和３年度
公立大学法人新潟県立看護大学
看護研究交流センター　活動報告書

令和４年４月　発刊

発行　公立大学法人 新潟県立看護大学 看護研究交流センター
〒943-0147　新潟県上越市新南町 240 番地
TEL・FAX　025-526-2822